

県立博物館

総合調査報告書 VII

—浜比嘉島(はまひがじま)—

當間 嗣一：浜比嘉島小史	1
金 武 正 紀：浜比嘉の遺跡	19
千木良 芳 範：浜比嘉島の造網性のクモ類について	33
大 城 學：浜比嘉島の祭場と儀礼	43

1990

沖縄県立博物館

ごあいさつ

沖縄県立博物館では、特定の島や地域に焦点をあてた総合的な調査を年次的に実施しております。この調査は、当該地域の自然、考古、歴史、美術工芸、民俗等について調査し、その結果を学術報告書としてまとめるものです。その成果は、当館の常設展や企画展にも反映させ、当該地域について広く紹介することを目的としています。

平成1年度の総合調査は、勝連町の浜比嘉島で実施しました。浜比嘉島は与勝半島の東海上にあり、津堅島とともに、与勝地域ではまだ本島と陸続きとなっていない島です。近い将来に平安座島との間に橋が架かる計画もあり、陸続きとなれば様々な環境の変化が予想されます。その意味では、今回の総合調査は極めて意義深いものと考えております。

本報告書では、浜比嘉島の遺跡や歴史、民俗、自然について、当館の職員がそれぞれのテーマに基づいて調査した結果を収録しました。浜比嘉島を理解する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の総合調査を実施するにあたって、勝連町教育委員会を始め、浜比嘉島のみなさまから絶大な協力をいただきました。ここに記して、深甚なる謝意を表します。

平成2年3月

沖縄県立博物館

館長 大城宗清

浜 比 嘉 島 小 史

當 真 緗 一

(沖縄県立博物館)

Some Notes on the History of Hamahiga Island

Shiichi TOHMA

(Okinawa Prefectural Museum)

もくじ

- 1、はじめに
- 2、島の概況
- 3、概略史
- 4、「ヤマトウンチュー墓」と水戸藩廻船の漂流史料について
- 5、おわりに

1、はじめに

『おもろさうし』(巻16-5、No.1131) に「ばま ひやもざ みやれは」(浜、平安座を見遣れば) とみえる浜比嘉島は、勝連半島の東海にあって周囲 7 kmにも満たない小さな島である。18世紀中葉に編集された『球陽』には、海を隔てた小島で、風による作物の被害が大きく、海を生業としていると記述されている。この小さな島にはじめて人々が住みはじめたのは今から 3 千数百年前のことであった。

その後の文献資料には、1784年(乾隆49)

の飢饉、1790(乾隆55)の疱瘡の流行、1792 年(乾隆57)の風害のための耕地の荒廃などが記録されている。

このような過酷の歴史を経ながらも島人たちのたゆまぬ努力によって島の歴史は育まれ、今日見るように浜比嘉島へと発展してきた。島人たちは、「この島は、長い歴史と伝統を持ち、緑豊かな自然のふところに囲まれ、四季色とりどりの花が咲き、小鳥がさえずる、のどかで素朴な風情のただよう島」(『神の島 浜比嘉島のはなし—伝説一』勝連町立比嘉小学校発行・編集) だという認識のもとで、島に対する誇りを持つつ現代を生き、未来に向かって前進しているのである。

さて、今回で7回目をむかえた当博物館恒例の総合調査の調査地として選ばれたのがこの浜比嘉島である。学芸員として歴史を担当しているということもあって、今回の調査では島の歴史について何かをまとめ

なければならないということになり、1泊2日の日程で島に渡ってはきたもののテーマがなかなか定まらない。というのも、考古学を専門とする筆者にとって考古学上の遺跡や遺物のことには多少の予備知識はあっても、島の歴史を考える史料のことについてはまるつきり知識がないのである。それにも負けず「犬もあるけば棒にあたる」式でデスクワークの資料調査と並行しながら島の歴史について具体的に調べてみることにした。

よく、沖縄の地域史研究を進める上での障害は琉球王国時代における歴史資料の少なさにあるといわれる。たしかに浜比嘉島にしてもそうである。琉球王国時代の浜比嘉島の歴史を考える史料はきわめて少なく、残念ながらごく限られたものしか残っていない。その限られた資料の中からやっとのおもいでまとめてみたのが次の成果である。したがって、本稿は、あくまで浜比嘉島の歴史的な一側面を概略したにすぎない。稿を草するにあたりまずそのことをおことわりしておく。

2、島の概況

浜比嘉島は沖縄本島中部の勝連町に属し、屋慶名港から東へ約3.55km離れた海上に浮かぶ小島である。島の西側にある集落が勝連町字浜であり、東側の集落が勝連町字比嘉である。現在、島への交通は浜へ4便の快速船が約15分で、比嘉へ2便～3便の渡船が約40分で屋慶名港を起点に島々を結んでいる。

島の地質は、泥灰岩土壌、沖積土壌、琉球石灰岩からなり、周囲約6.7km、南北2km、東北1km、総面積1.95km²の島である。島の地形は西に高くなっているが、全体としてほぼ平坦で、最も高いところでスガイ山が78.7mを測るだけである。浜の集落は海岸砂丘地に立地し、海岸線はみごとな白浜が帯状に延びており、浜の名はこの立地条件からきたものと思われる。一方、字比嘉の方は、浸食地形で比高15mの海蝕崖が続き、珊瑚礁や砂浜の発達にも乏しい。海蝕崖の裾野には沖積地が開けており農耕地として利用されていた。海蝕崖に現れる島尻層の上縁からは地下水の湧出もみられる。

島の人口は平成2年3月末日現在つぎのとおりとなっている。

浜部落

人口 374人(男196人、女178人)

世帯数 128世帯

比嘉部落

人口 245人(男125人、女120人)

世帯数 108世帯

3、概略史

浜比嘉島は考古学上の遺跡が多いところである。これまで発見されている遺跡は、沖縄貝塚時代の前期からグスク時代におよんでおり、3千数百年前から現在まで連綿として人間活動の舞台となったことが知られる。

比嘉小学校の北約300mの石灰岩台地に開いたドリーネの洞窟は、中の御嶽と呼ばれ現在村人の信仰地になっている。そこは

中の御嶽貝塚と称され3千数百年前の遺跡としても知られているところである。農耕が未だ行われなかつた貝塚時代前期の頃に浜比嘉島に最初に住み着いた人々は何故かこの御嶽のような石灰岩の狭隘地を好み生活の舞台としていた。彼らは数人からなる血縁集団をつくり、豎穴状に開いたドリーネの洞窟を住居として狩猟・漁撈を営んでいたのである。

2千数百年前になると、貝塚の人々はこれまで住んでいた石灰岩狭隘地を捨てて兼久集落の西に展開する石灰岩丘陵台地のオープンサイドに進出してきた。彼らにとってこの丘陵台地は、これまでの場所と比べ全くの別天地であり、新しい生活を保障するところであった。この遺跡は、未調査のため現在散布地として報告されているものの、遺跡の立地条件からして宮城島のシヌグ堂遺跡や伊計島の仲原遺跡と同じように、当時の人々の原始集落が営まれた集落遺跡の可能性が強いところである。この時期になると沖縄の貝塚人はあっちこっちに比較的大きな集落を形成するようになる。勝連半島に連なる伊計、宮城、平安座、浜比嘉の島々、小さな島ながらもいずれもこの時期の遺跡が珠玉のように散らばっている。伊計島には仲原遺跡、宮城島にはシヌグ堂遺跡や高嶺遺跡、平安座島には東ハンタ原遺跡、そして浜比嘉島にこの兼久西丘陵遺物散布地といったぐあいである。

千数百年前の浜比嘉人は珊瑚礁のラグーンを控えた砂丘上に生活の舞台を移す。この時期には人口も増加し、生活圏も拡大し

ていった。前之井戸の前の畠から浜中学校の校庭にかけて広がる浜貝塚は、当時の遺跡として研究者の間でよく知られている。遺跡は現在の浜集落と重なって立地しているために住宅建設や道路の改修などによって毎年毎年破壊されてきている。十数年前、体育館を建設するため床掘りをおこなったところ人骨が発見され大騒ぎになったことがあった。当時、県の文化課に勤めていた筆者は、当館の金武正紀主任専門員ら数人と共に夜遅くまでかかってこの人骨の発掘をおこなったことがある。人骨の出土状況については、金武氏の「浜比嘉島の遺跡」の項を参照。

今から800年前になると按司と呼ばれる地方領主が現れ、沖縄の各地にグスクを築き互いに勢力を争うようになる。この時代をグスク時代と呼び今から約400年前まで続く。このころ築城されたのが浜グスクであり、比嘉グスクであった。

按司たちの互いの争いの抗争の中から「按司の中の按司」が出現し、やがて彼らは「大世の主」と呼ばれるようになる。「大世の主」たちは、日本本土を中心に中国やその他の国々と中継貿易を行って富を蓄え、政治的な支配力を強めようとした。彼らが居城したグスク跡からは南海貿易で手に入れた輸入陶磁器の破片が大量に発掘される。

勝連半島一円を見据える要衝に築かれた勝連グスクは、この一帯を治める大世の主が居城したグスクで、1458年の阿摩和利の乱で廃城となるまで「京」や「鎌倉」にたとえられるほど栄えたグスクであった。事

実、勝連城跡からは、当時の繁栄ぶりを示す元様式の青花などが数多く発掘されている。

『おもろさうし』卷16－5にNo.1131（『おもろさうし』日本思想体系）

精高おわもりぎや 降りて 群れ
舞へば 島通て 来る様に
又 君のおわもりぎや 又 真物
寄せ ちょわちへ 伊計離れ
ちょわちへ
又 さすが添い ちょわちへ 浜
平安座 見遣れば

大意：靈力豊かなおわもり（神女）様が、まものよせ・さすかおそい（城内の建物）に降臨なさって、群れ舞いをなさって、伊計・浜・平安座を見ると、島々が寄つて来るようである。

このオモロは、浜比嘉島の歴史について以下に述べる二点のことを教えてくれている。第一に、このオモロがうたわれた時代には、周辺の島々がすでに勝連グスクの統治下に組み入れられていたことである。おそらく、浜比嘉島に築城された二つのグスクの接司たちは、より強力な勝連接司の支配の下で浜と比嘉両集落の人民支配を行いつつ、それぞれのグスク経営をおこなっていたのであろう。

では、彼らが拠っていたと思われる浜グスク、比嘉グスクとはどんなグスクであろうか。浜グスクは、現在は浜集落の東南東

後方、標高約60mの琉球石灰岩台地の先端部に占地して浜集落を見下ろすように立地している。グスクの周囲は天然の崖となっているが、一方向だけが緩やかになっていてそこに虎口が取りついている。城内は北から南側にいくにつれ漸次高くなり、低い所と高い所の比高差は約3mを測る。南側は三つの平場で構成され連郭式のグスクである。城内的一部には野面積みの石垣が認められるが、ほとんどが崩壊し、往時の姿を止めてない。グスクからの眺望はよく、眼下に浜の集落、その北に平安座島、西に勝連半島、南に津堅島を望むことができる。

比嘉グスクは、比嘉集落の西南、琉球石灰岩からなる小高い丘の上にある。主郭に相当する丘上は、周囲が断崖に囲まれ、天然の要塞になっている。グスクに入るには、比嘉集落の旧公民館から浜集落に至る道路を数10m行くと、左に折れる坂の小道がある。この小道を登っていくと両側に段々状になった削平地が認められる。これらの削平地は、かつて段々畑として利用されたこともあるが、もともとは比嘉グスクの削平地で、郭を構成する。これらの郭を両側に見ながらさらに上へと進んでいくと、小道は左へ折れる。さらに10mほどいくと岩山に至る。この岩山の上が比嘉グスクの主郭ともいいうべきところで、虎口が複雑になり、岩と岩の間を攀じ登るようにして頂上に辿りつくと、約150坪程の平場になっている。この平場は、現在ススキや雑木が繁茂しているため、内部構造について詳しく知ることはできないが、表面的な観察では野面石

積みによって2つの郭に分かれているようである。

ところで、集落側からグスクにいたる道の両脇には段々状に構成された平場が数段によって構成されており、虎口を防御するための意識的な郭配置になっている。この比嘉グスクの縄張りを見ると、最上段の平場を主郭に、この主郭への進入を防ぐために虎口をわざと狭めたり、虎口に段差をつけるなど工夫された跡がはっきりと読み取れる。僅か2000km²の小さい島に、これだけの縄張りをもつグスクが何故必要だったのか、当時の歴史をひもとく上でこのグスクが果たす役割は大きい。

比嘉グスクや浜グスクが何時、誰によってつくられたかは定かでない。おそらく、14世紀から15世紀ごろグスク時代になってから諸按司が各々の領地にグスクを構えて割拠していたときに2つのグスクも創建されたものと思われる。そのことを裏づけるようにグスク内やグスクの周辺から14～15世紀ごろ中国で生産され陶磁器貿易によつてもたらされた輸入陶磁器類の破片が出土する。グスク時代とは、沖縄の考古学研究者が貝塚時代の後期に後続する時代として設定した時代区分で、時代的には12世紀ごろから15・16世紀ごろまでの時代をいう。沖縄の各地に分布しているグスクが造られていく時期がまさにその時代で、日本史でいえば平安後期から鎌倉・室町時代のころに相当する時代である。

この時代の遺跡には、指標となるグスクのほかに浜グスク南方散布地、ミーハン

チャーガマ洞穴遺跡、浜小学校東遺物散布地、浜川洞穴遺跡、クバ島遺物散布地などが知られている。いずれも発掘調査が行われたことがないので詳細についてはまだわかつてない。

第二には、浜比嘉島の呼称についてである。おそらくこの『おもろさうし』の「ばま」の記述が浜比嘉島の呼び方についての初現であろう。その後、浜比嘉島については『中山伝信録』や『琉球国志略』の中で「巴麻」と記され、ゴーヴィルの『琉球覚書』にはパマ (Pama)、『ペリー訪問記』の中ではカマと見えている。

農耕の発生は、これまで食料を得るために転々と移動してきた人間生活を定住化の方向へと発展させやがて部落発生にもつていった。四面を海に囲まれた浜比嘉島では、海への依存度が高かったために、食料獲得によって生活の場所を変える必要もなかつたと考える。従って、ムラの発生も比較的早期に属するだろうと見られている。

浜集落は、最初、浜グスクの周辺に散村として存在していたのが、人口増加につれてやがてグスクを背に南側に住居を定め、アガリガーに近い大殿内や東親川方面から南の方へと漸次拡大発展していったもののように思われる。

比嘉集落の場合は、ウィーヌガーの自然湧水を中心に小集落が形成されていったであろう。グスク時代には、冒頭でも述べたように、浜比嘉島は勝連按司の施政下に置かれていたことになる。勝連按司の居城が勝連グスクであり、この勝連グスク最後の

按司が阿摩和利という人物であった。地元での伝承によると、彼は、仁政を施し、領民から厚い信頼を得ていたということであるが、首里王府に謀叛したというかどで尚泰久王の軍によって滅ぼされてしまった。ときに1458年のことであった。

1609年、薩摩は琉球に3000人余の兵隊を派遣して首里城に攻め入った。その後琉球は、薩摩の支配下に置かれるようになり、「掟十五カ条」と呼ばれる法度や上納を強制し琉球王国の支配を強めていった。

浜比嘉島の住民に課された租税出納の管轄は当初首里王府の越來代官によってなされ（『琉球国由来記』巻2 1713年）ていたのが、1660年以後になると改定されて中頭方代官の管轄とされるようになった。

当時の百姓の負担は重く、王府への上納、薩摩への貢租、地頭おえか人の知行役俸の負担等々が村を単位として課され「殺さないように、生かさないように」の生活を強いられてきた。

琉球王国の地域支配は間切・村制度を通じて行われた。現在の市町村にほぼ相当するのが間切であり、現在の字の前身が村であった。記録では、浜比嘉島は勝連間切に属し、1675年までは、浜村の一村だけであったのが、1676年の与那城間切新設の際に新しく比嘉村が置かれることになった。

17世紀の中頃に作成された『琉球国高究帳』（『沖縄県史料』前近代1に所収）には、耕地の石高についてつぎのように記述されている。

ばま島

一、高頭四拾四石五斗六升壱合五才

内 田方式拾七石壱斗八升弐合六勺
七才
畠方拾七石三斗七升八合三勺八
才

この記録によると、名目上の生産額が44石5斗6升1合五才、その内、田が27石1斗8升2合6勺7才、畠17石3斗7升8合3勺8才で、畠より田の方が多かったことがわかる。近隣の平安座島、宮城島、伊計島、津堅島などが、水田より畠が支配的であるのと比べると浜比嘉島の場合は圧倒的に水田が多かったことになる。

1903年（明治36）に土地整理が完了し、地租条例が実施されるによんで従来からの土地共有制から私有制に変わった。土地整理以前の沖縄の土地制度は、地割制度であったために耕地のほとんどが村の共有になっていた。しかし、土地整理以後は土地の私有権が確立し、租税も共同納租から個人納となり、地価の2.5パーセントを地租としてお金でおさめるようになった。

1896年（明治29）になると地方制度の改革がはじまった。首里と那覇に区制がしかれ、ほかの地域には五つの郡が編成された。1897年（明治30）には、間切や島の番所は、「役場」と改められ、地頭代以下の旧役人は廃止された。また、「沖縄県及島嶼町村制」の施行によってこれまでの間切・村が村と字に改称されるようになり、従来からの勝

連間切浜村はこの時点では勝連村字浜と呼ぶようになった。

1909年（明治42）には、平安座漁民との間で専用漁場をめぐって双方が互いに争うという事件が起こった。この争いは結局乱闘事件にまで発展し、公務妨害の罪により平安座側から数名の逮捕者がいるまでにエスカレートした。

大正2年には糸満漁民との間で浮原島の使用をめぐっていわゆる浮原事件が起こった。

この事件は、県庁の知事室において、中頭、島尻の両郡長及び、糸満町長、勝連村長のほかに高橋知事、永田内務部長、橋本理事官、糸満警察署長、嘉手納署長らが仲裁委員になって委任承諾を得て契約書を作成し、糸満漁民総代と浜比嘉住民総代が同意署名捺印して一応の落着をみることになった。

契約書の内容は次のとおりであった。

一、糸満漁業者は浮原島に入居した在任中は鰯釣期間内、同島に在る阿旦葉及び雑木雜草の伐採をしないこと。

二、諸作物を害せざること。但し前項第一の事項は町長及び漁民総代に於いて十分に取り締るべきこと。

三、糸満漁業者は第一項の期間中、浮原島へ来島漁業する者は津口料として漁船一艘につき金壱円四拾錢を大正2年10月10日限り総代に於て取纏め浜比嘉へ支払うべきこと。

但し来島者は耕地に小屋を建設しない

こと。

四、前項の支払期日を怠るときは、糸満町長は直ちにその総代に通知し支払をなさしめる責任あること。

五、本契約は大正2年漁期間効力あるものとす。

これらの漁場問題は、四面海に囲まれた島では必然的におこる問題であった。おそらく、時代が遡ればのぼる程このような問題は頻繁に起こったであろう。とくに浜比嘉島の事例は、島の沿岸が良好な漁場にめぐまれているということもあって、これらの漁場をめぐって周辺の漁民との対立も大きな社会問題にまで発展する好例であったのである。

現在は、漁業権の設定などにより、漁業従事者が法律によって守られており、このような問題もみられなくなった。

1899年（明治32）、当山久三などのはたらきによって、沖縄からはじめてハワイへの海外移民が送られた。その後、海外移住に対する一般民衆の恐怖心も和らぎ、多くの県民が新天地をもとめて、海外へ移住するようになった。

浜比嘉島も多くの海外移住者を出したことでつとに知られている。とくにハワイ渡航全盛時代の明治38、9年頃は、勝連村役場が渡航手続きの比嘉の青年たちで占領されるほどであったといわれている。

現在、比嘉出身のハワイ在住者は約140人前後で、二世三世が大部分であり、一世の最年少者はもう80乃至90歳といわれている。

また、在ブラジル浜比嘉出身者は、26世帯である（『在伯沖縄県人五十年のあゆみ』）。

海外移住者の第1回目の渡航者は、浜出身者の場合が1919年（大正8）に梶原蒲啓氏で、比嘉出身者が1913年（大正2年）の栄口蒲戸夫妻と前門蒲戸夫妻であった。

昭和初期段階での県外や国外に移住している人の数（戸数と人口）と彼らが沖縄の家族へ送った送金額は次のとおりであった。

字	当時の戸数と人口	出稼ぎ員数	送金額
浜	103戸(493人)	本土30人　外国116人	4,715円
比嘉	131戸(691人)	本土45人　外国607人	10,066円

1920年（大正9）には、町村制の施行があり、はじめて村長選挙が行われ他府県のみの自治体制が確立された。その頃、漁業の振興を図る意図で浜、比嘉などの住民は低利資金で各一隻ずつの艤船を建造し、艤漁業を展開したが、あまり業績がふるわず、資金の返済などで難渋するありさまであった。

今次大戦の被害は、浜・比嘉両字とも少なく、家屋なども昔の面影をとどめているところが多かったが、近年は種々の開発などによって、その姿も消えてつつあるというのが現状である。

4、「ヤマトウンチュー墓」と水戸藩廻船の漂流史料について

字浜集落の東海岸アダン林の茂みの中に墓碑が建っている。この墓碑のことについては、すでに浜出身の前川守夫氏によつて

「ヤマトウンチュー墓」のこととして発表されている（『沖縄民俗同好会会報 No.21』1975年1月）。以下は、氏が報告した墓碑の内容である。

天保〇年子二月〇日奥州南郡領宮古〇

宗安信士 五助

同年同月二日

吉 宗全信士 右同所 源〇

同年同月〇〇

自得了亀信士 奥州仙台田代

同年同月五日

源心宗達信士 右同所〇〇

同年同月〇〇

南岳良周信士 奥州（以下不詳）

当時、この碑石の由来や内容とすることについてはよくわからなかったが、その後、1979年9月、岩手県宮古市の方からこの墓碑の内容を裏づけるような問係史料が勝連町教育委員会に送付されてきた。この史料は、宮古市の市史編纂中に注意されたもので、市史編纂委員の花坂藏之助氏を介して送られてきたものである。

古文書の内容は、いまから151年前の天保10年に水戸藩（現在の茨城県那珂湊の廻船）の廻船が乗組員七名を乗せて漂流し、四ヶ月後に浜比嘉島へ漂着し、島の人たちによって救助されたが、5人はすでに死亡し、生存した人はたった二人だったということがわかるものである。

古文書はB5判の10枚、3部構成からなる。一は、生存した二人について薩摩藩が

取り調べた供述書。二は、生存者二人が琉球の役人にあてた死者5人の埋葬許可と死亡証明書の発行依頼。三は、寺の住職発行の埋葬証明書である。公文書の史料はいずれも「写し」で、死んだ乗組員の遺族に届けられたものと推測されている（10頁～12頁参照）。

江戸へ向かって港（現在の茨城県那珂湊）を出てから救助されるまでの状況をまとめるとつぎの通りとなる。

1839年(天保10)	11月25日	茨城県那珂湊を出帆
	〃	夜12時頃 北西の風で大シケ
	11月28日	大シケ
	12月4日	大シケ、帆柱を切り捨てる、積み荷の大半を海に投げ捨てる。
	大晦日	飲水少なくなる。
1840年(天保11)	1月4日	恵みの雨が少々降る。
	1月27日	ついに飲み水がなくなる。 真冬というのに凌ぎ難い程暑い
	2月1日	一番若い五助（農民18歳）死ぬ。
	2月2日	源助（同50歳）が死ぬ。
	2月5日	吉蔵（同30歳）、仲蔵（同47歳）、亀松（同31歳）の3人が死ぬ。
	2月6日	前日から少し雨が降る。
	3月28日	島影が見えた。
	4月3日	朝、舟を発見、浜村の漁民に救助される。
	8月15日	鹿児島経由で郷里へ。

5、おわりに

はじめて浜比嘉島に渡ったのは1966年2月であった。当時、琉球大学史学科の学生

だった私は、歴史研究会に所属する十数名の部員と一緒に歴史調査の目的で島に渡ったのである。その前年には伊平屋島と伊是名島、さらに前々年には久米島や久高島に渡ったことがあり沖縄の島々の風景については見慣れていたものの、浜比嘉島に渡った時の印象は強烈で、その時の印象は今でもよく覚えている。集落の屋根を彩る赤瓦の屋根、珊瑚石灰岩で高く積み上げられた石垣、フクギの屋敷林によって囲まれた家並など、戦前の写真でしか見ることのできなかった沖縄の姿がそこにはあった。その後、何度か浜比嘉島に渡った。島に来る度にびっくりさせられるのは島の激変である。今回の調査で渡った時には、赤瓦の屋根は少なくなり、フクギの屋敷林と石垣はほとんどブロック塀に変わっていた。美しかった砂浜が消え、逆にコンクリートで固められた護岸と港湾が異様に目に入ってくる。島の近代化を象徴しているのだろうか。古い沖縄の集落景観を残していた島の景観はほとんど失われ、今日沖縄本島のどこの地域にも見られるような集落景観に変わりつつあり、その変貌ぶりにはただ驚くばかりである。

写真1から写真4までの写真を参照して欲しい。写真1と3は今から24年前の1966年に撮影した写真、写真2と4は今年撮影した写真で、何れも比嘉グスクからの写真である。比較対象しながら見て欲しい。写真2では、農耕地が荒廃している状況がよくわかる。写真1の古い写真では丹念に耕された畑が写り、短冊型に区画された地割

の跡を残す畠もよく分るが、写真2では耕された畠は消え、ススキや雑木の茂る荒廃地になっている。

写真3と4は、整然としたたたずまいを見せる比嘉部落とアマンデ（アマンチュー墓がある）を比嘉グスクから眺望した写真である。赤瓦の屋根が少なくなり、海岸にはコンクリートの護岸ができて美しかった海岸線が消えてしまったことが良く分かる。

このように、僅か数十年の間に島の景観はどんどん変わっていくのである。生活環境の変化に伴っていろいろなものが変わっていくことは避けられないことであろうが、沖縄の原風景が一つひとつ消えていくのは、なんとも忍び難いものがある。

島には島の歴史があり、島なりの良さがある。島の歴史性とそこに生きた人々の文化が根強く残されているのもこのような小さな島々である。今回の調査は、島の自然や人文を調査して、種々の資料を収集し、広く内外へ紹介するという博物館活動の一環として実施されたものであった。予算の都合などもあって、1泊2泊という短い調査日程ではあったが、島の方々からの聞き取りや過去に行った調査日誌をもとに『勝連村誌』を参考にしながら何とか標題のテーマでまとめることができた。

調査の際には、煩わしい中にも貴重な時間を惜しげなく下さった多くの方々に感謝しつつ小稿をとじることにする。



晴氣佳良、萬物以春之氣為生、故謂之
春二月也。是時氣溫和、風氣順、節
生門子火、子火主長、故謂之生。

陽氣生於正月、三月太以虛也、故謂之
卦。四月、正月、夏月、秋月、冬月、皆謂之
深。私以卦承承者、則謂之四時矣。而謂之
夏者、以夏卦之正也。謂之正者、則謂之夏
也。謂之正者、則謂之夏也。

夏者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

生者、生也。生者、生也。生者、生也。

太甲之子、若水之演也。

舜禹之子、若水之演也。

太甲之子、若水之演也。

太甲之子、若水之演也。

常移水之演也。

子八月

皇帝之演也。

水之

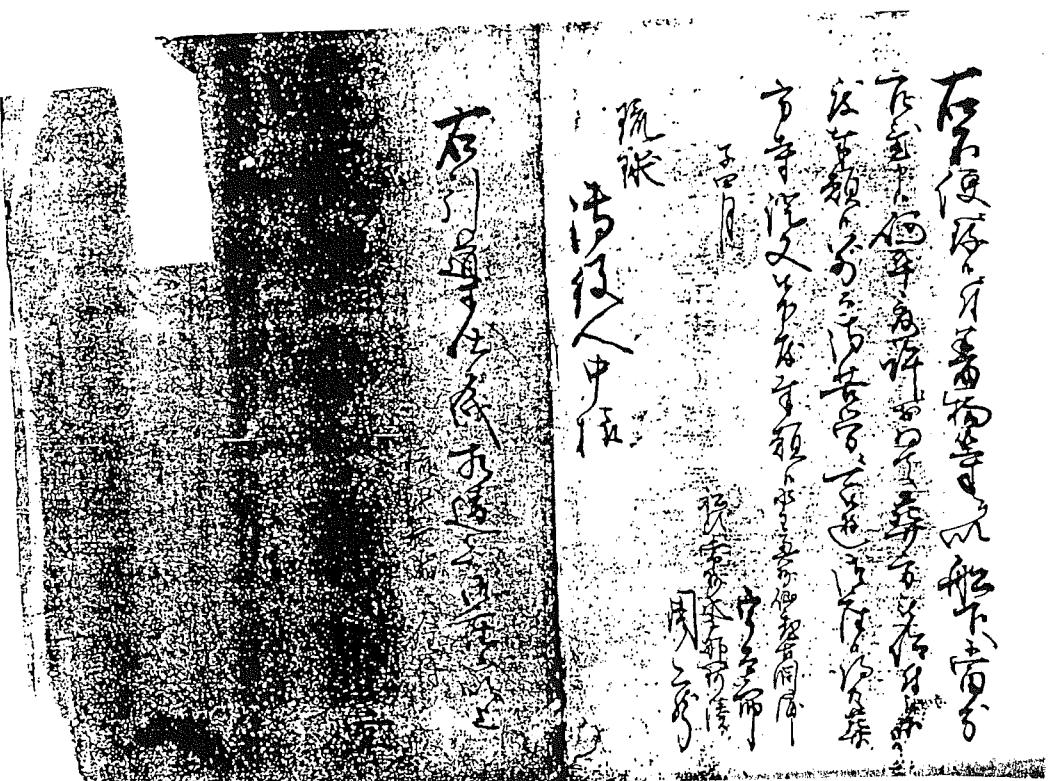
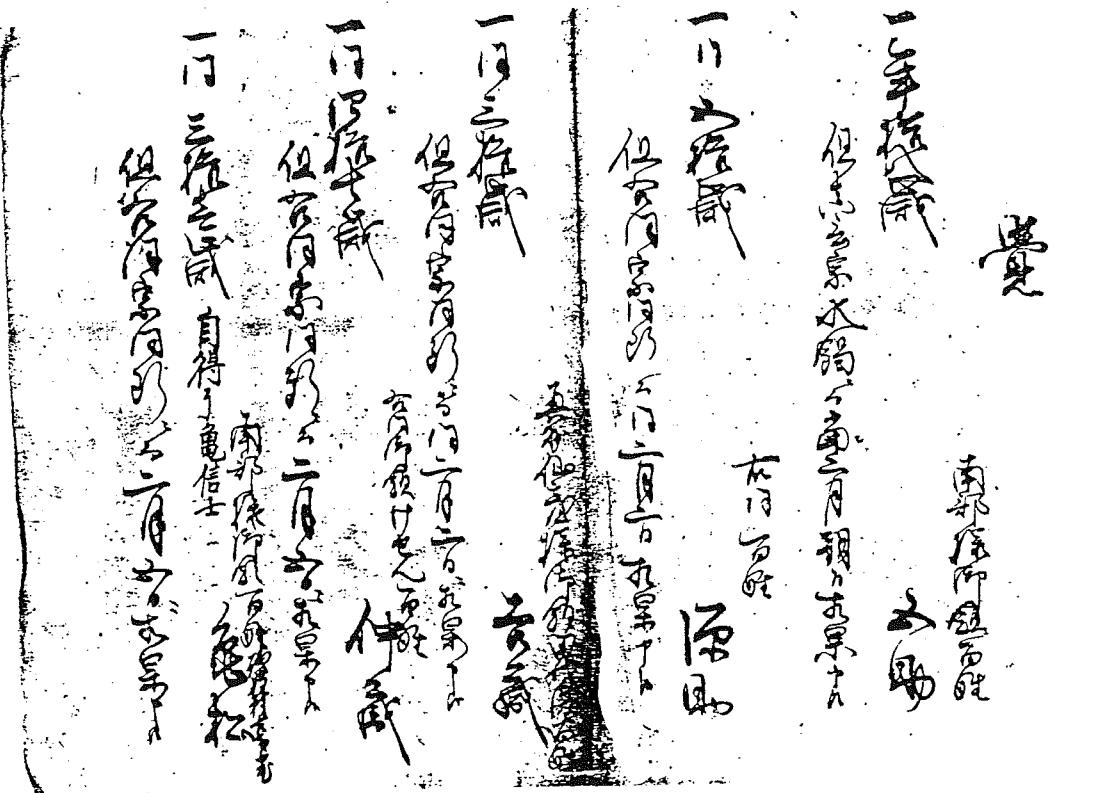
印之節

周易

皇帝之演也。

印之節

周易



覚

拾五反帆、宝来丸、船壹艘

船頭水主七人乗

右は水戸御願 船主祐吉船にて那珂之湊より 同領平浮
湊へ廻船つかまつり商売物積入 江戸へ差越申掛にて 去
る亥十一月二十五日出帆つかまつり候所 同夜九ツ頃より
酉戌の風大風にまかりなり 鹿島浦より吹流され次第く
に浪高に相成 桅も痛みよんどころなく 同二十八日又々
大風にて それなり相流れ申し候 同十二月四日又々風強
くまかりなり 船保ち難く 帆柱切捨て 積荷過半打捨
酉戌の風にて相流れ日の下迄参り 別して暖くこれあり凌
ぎ難く

同晦日より水飼相成 朝夕賄汐婦かしにて相用ひはなは

だ成難くつかまつり 雨潤の立願つかまつり候所 子の正
月四日少々雨降り雨水取得ながら ようやく助命つかまつ
り居所 同二十七日迄すべて拂底つかまつり 東の方へ遠
く相流居 暖気凌ぎ難く相考ひ表かんばんへ格護つかまつ
り置候 二月五日雨降り少々雨水取得 助命つかまつり

同十五日より十七日迄寅外の風にて酉戌の方へようよう相
流れ 三月二十八日昼頃より次第に山見掛 四月一日の夜

北方近くに流れ寄り 翌三日の朝漁船見掛相招き申し候所
四艘参り案内にてその村へ引き入れくれて カツレン浜村
という所 それより追々御役様方御乗付 御手厚く仰せ下
さる由命じつかまつり 別して有難き仕合に存じ奉り候
もつとも 右村琉球の内カツレン浜村と申す所の由 右所
より寄内召され 時十二日発足つかまつり 翌十三日那霸
久米村へ着きつかまつり候所 懸御役々様の者より別して
御手厚く仰せ下され 誠に有難く滞在つかまつり候所 去
る八日宝円丸に召されて乗り那霸出航 同十三日山川へ着
船つかまつり御番所御改を受け 昨十五日昼時分 山川出
航昨夜五ツ時分御当地着船つかまつり 有難き仕合に存じ
奉り候 御糺に付 是までの形行なまわき 此の段申し上げ候 以
上

但相果候五人の者共 カツレン浜の内へ葬万成し下され
これ又有難く存じ奉り候

亥十一月二十五日より 子四月三日迄の間 嶋見掛申さ
ず もつとも汐掛などつかまつり候儀も 御座無く候

常州水戸領 那珂湊

船頭 周蔵

奥州仙台領 古瀬浦

水 主 外太郎

子八月

薩摩様御役所中

覚

一年拾八歳

南部様 御領百姓

五助

子四月

水主奥州仙台古瀬浦
宇太郎

して御苦勞に遊ばざるべく御座候得共 葬方寺證文下され
度願い奉り候

一同五拾歳

但真言宗 水飼にて当二月朔日相果申候

右同百姓

源助

琉球

周藏

一同三拾歳

但右同宗同断にて同二月二日に相果申候

奥州仙台様御領田代浜

百姓吉蔵

御役人中様

一同三拾七歳

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

右同御領 けせん百姓

仲蔵

右引導つかまつり候儀相違御座無候

以上

一同四拾七歳

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

右同御領 けせん百姓

仲蔵

古葉屋

自得了龜信士

亀松

琉球長□寺住持

道順西堂印

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

右不便に存じ候に付 着物等を以て船下へ當分召置申し

候 何卒爰許において葬方仰せ付下され度 願い奉り候 別

天保十一年子四月八日



写真1 比嘉グスクから兼久集落を望む
(1966年撮影)

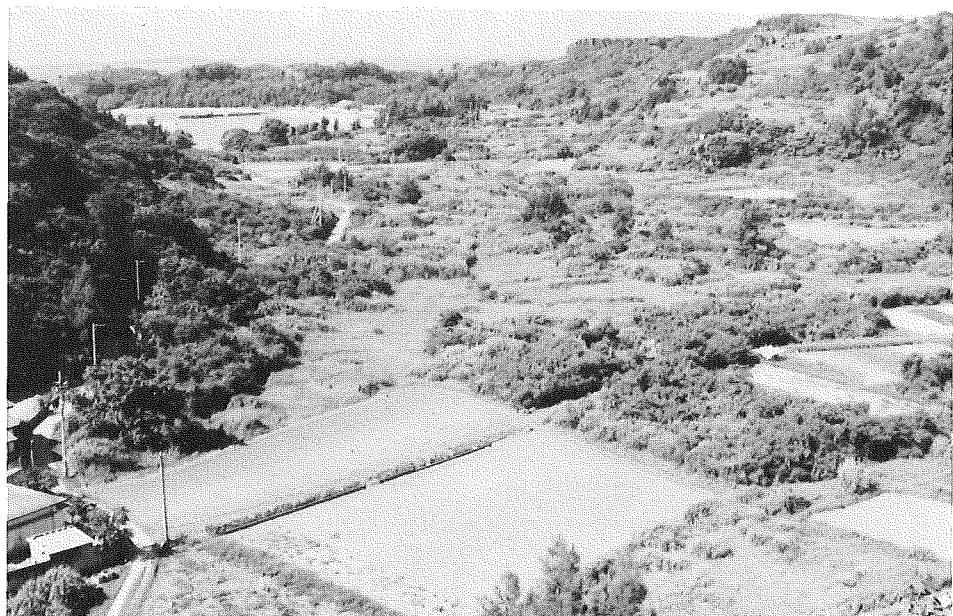


写真2 同上 (1989年撮影)



写真3 比嘉グスクから比嘉部落とアマンヂを望む
(1966年撮影)

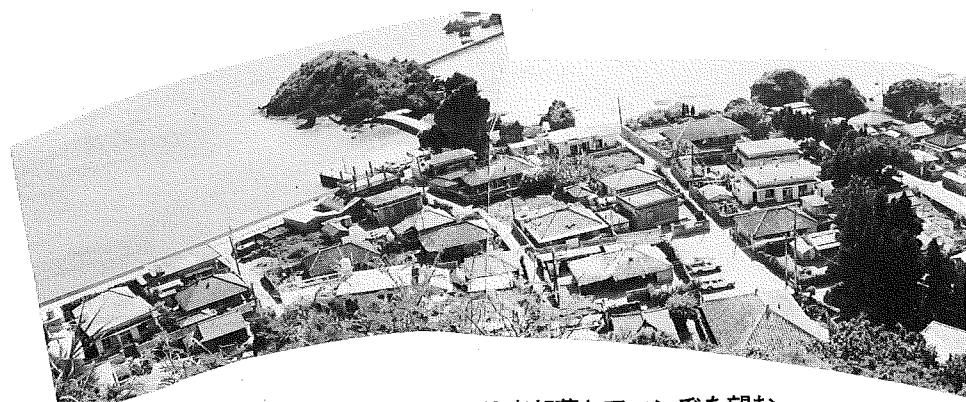


図4 比嘉グスクから比嘉部落とアマンヂを望む
(1989年)



図5 浜グスク遠景（中央の高い丘）
1973年7月撮影

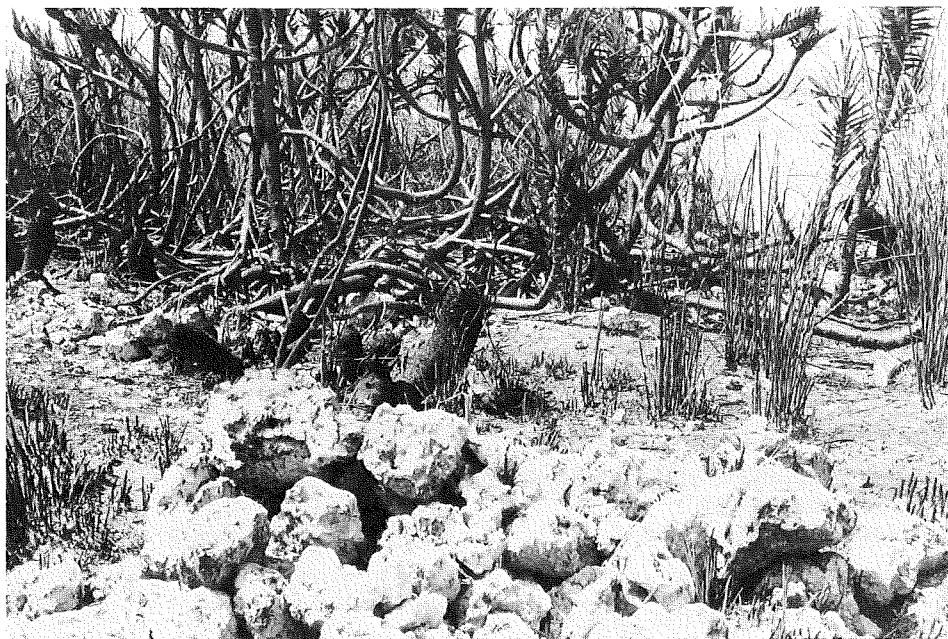


図6 浜グスクの内部



図7 比嘉グスクの虎口付近

引用文献及び参考文献

- 『おもろさうし』 日本思想大系18 外間守善・西郷信綱 岩波書店 1972年
『球陽 読み下し編』 球陽研究会 編
『神の島 浜比嘉島のはなし—伝説—』 勝連町立比嘉小学校発行・編集 昭和61年
當真嗣一『勝連村の原始・古代を訪ねて』 勝連村教育委員会 1979年
『歴史研究』 第2号 琉球大学歴史研究会 1966年
『浜比嘉島調査報告』 会報第10号 沖縄国際大学考古学研究会 1984年
『勝連村誌』 福田恒徳 編著 1966年
『勝連町史 二』 勝連町史編集委員会 昭和59年
『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 昭和61年
『ぐすく』 沖縄県教育委員会 1983年
『沖縄県史料』 前近代1 沖縄県沖縄史料編集所 1981年

浜比嘉島の遺跡

金 武 正 紀

(沖縄県立博物館)

Notes on the Archaeological Sites of Hamahiga Island,
the Okinawa Islands

Seiki KIN

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

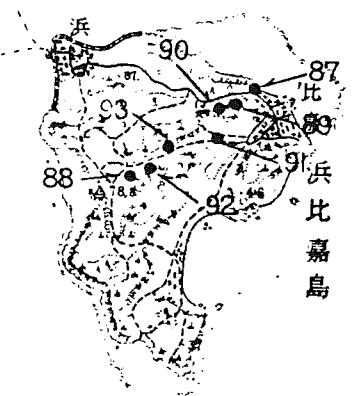
沖縄県立博物館の浜比嘉島総合調査の一環として、1989年8月30日～9月1日まで浜比嘉島の遺跡分布調査をした。しかし、かつての畑はススキやギンネムが生い茂った荒地と化し、周知の遺跡の確認すら困難である。今回調査できたのは浜貝塚、浜グスク、比嘉小学校東遺物散布地、比嘉グスク、浜川洞穴遺跡、ソージガー南西畑地遺物散布地、クバ島遺物散布地の7遺だけである。また、実際に踏査できた遺跡でも表面採集できる遺物は親指大ほどの小破片数個程度であり、遺物紹介にもならない。

そこで、今回は、浜比嘉島の考古学研究の歴史を概観し、その中で遺跡の紹介を行ないたい。なお、遺跡紹介の番号は一連番号でまとめた。

研究史と遺跡概説

1 多和田真淳氏の調査

浜比嘉島における考古学の調査は、1964年1月の多和田真淳氏のサーヴェイを嚆矢



第1図 多和田氏発見遺跡

(『全国遺跡地図(沖縄)』)

- 88 うしとらの竜門洞窟遺跡
- 89 はちまん洞窟遺跡
- 90 中の御嶽貝塚
- 91 四柱洞窟遺跡
- 92 大あぶ洞窟隣り洞遺跡
- 93 三様洞窟遺跡

とする。氏は洞窟を中心に調査され、つぎの7遺跡を発見している。

はしまん洞窟遺跡（プレ縄文）

うしとらの竜門洞窟遺跡（後期下半）

中の御嶽貝塚（後期上半）

三様洞窟遺跡（晩期）

大あぶ洞窟遺跡（後期下半）

大あぶ洞窟遺跡の隣り洞窟遺跡（後期下半）

四柱洞窟遺跡（後期下半）

多和田氏の調査成果は、1968年発行の「全国遺跡地図（沖縄）」^(注1)と、1980年発行の「多和田真淳選集」^(注2)に掲載されている。各遺跡についての解説はないが、編年が遺跡名のあとについている。

2 琉球大学歴史研究会の調査

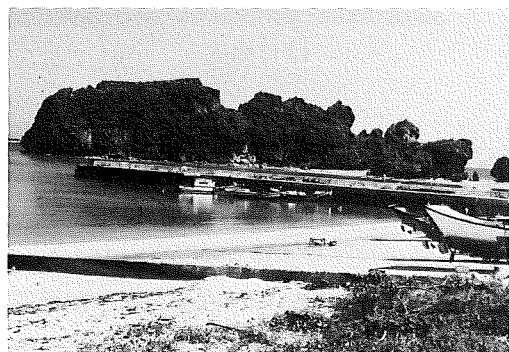
多和田氏のあとに調査を実施したのは、琉球大学歴史研究会（学生サークル）である。1966年4月、浜比嘉島の遺跡分布調査を実施した同サークルは、「歴史研究」第2号にその成果を紹介している。^(注3)

この調査で、多和田氏の発見した遺跡のほかに、桃原遺物散布地、浜中学校校庭遺物散布地、浜城東南畑遺物散布地、比嘉小学校東遺物散布地、クバ島遺跡があらたに発見された。なお、桃原遺物散布地と浜中学校校庭遺物散布地は後に命名された浜貝塚である。琉球大学考古学研究会の調査でもっとも注目されるのはクバ島遺跡の調査があるので、「歴史研究」から紹介する。

① クバ島遺跡

「兼久部落から海岸沿いに南に約五百米

位行くと、海の中に大きな岩山を見る。琉球石灰岩で出来たこの島は、満潮の時渡れなくなるらしい。この島に登るのは非常に困難を伴う。土地の人の話では、人の住んだあとがあるらしく石垣のくずれた跡があると云う事である。しかし我々の調査ではそれらしきものを確認することは出来ず、クバ島の頂上と西側傾斜面、北側断崖より数百片の土器片を採集する事が出来た。今、その土器片をみると三採集地とも同じ様相を呈し、薄手で、焼成の良い堅い土器片で、底部は後期独特のくびれ平底である。」



クバ島遺跡（北から）

3 沖縄県教育委員会文化課の人骨調査

1975年10月25日、「浜中学校体育館建設現場で人骨が発見されたので至急調査してほしい」という電話が県教育委員会文化課に入った。早速筆者と當真嗣一が現場へ行った。そのときの調査経過を當真是つぎのように述べている。^(注4)

(ア)頭蓋骨は工事の際のブルドーザーでとばされているが、頭骨を除く各部位は完全な形で保存されていた。

(イ)人骨の葬り方は、あぐらをかいだ姿勢で両足がくまれている。頭の向きは南

である。

(ウ)遺骸の下位には軽石（約2cm³）がまばらに敷きつめられていた。

(エ)遺骸の左側腰部から刀子が発見された。

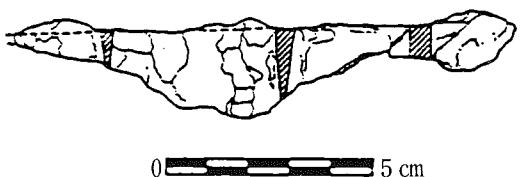
その他の副葬品は見い出されてない。

(オ)人骨を埋葬した際の掘り方は確認されていない。

ここで特に注目されるのは(エ)である。長さ約12cmの鉄製刀子が腰部で検出されたが、出土状況から腰部に着装していた可能性が強い。刀子は沖縄各地のグスクやグスク相当期の遺跡から検出されているが、現在のところ最も古いのは熱田貝塚第V層出土^(注5)である。人骨のすぐ近くには浜貝塚があり、また、浜貝塚の東丘陵には浜グスクがある。これらの遺跡と関係ある人骨なのか明らかではないが、今後も発見される可能性があり、注目しておきたい。



浜中学校校庭出土の人骨と共に伴った刀子



第2図 人骨と共に伴した刀子
（「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より）

4 沖縄県教育委員会文化課の分布調査

県教育委員会文化課は文化庁の補助を受けて、1975年と1976年の2ヶ年にわたって「沖縄県開発地域埋蔵文化財分布調査」を実施した。そのときに浜比嘉島の遺跡分布調査も実施された。^(注6)この調査であらたに兼久西丘陵遺物散布地、ミーハンチャーガマ遺跡、比嘉西海岸洞穴遺跡（浜川洞穴）が発見されている。その中で、兼久西丘陵遺物散布地について、次のように述べている。

② 兼久西丘陵遺物散布地

「浜比嘉島の東側兼久の西方丘陵の縁端および、その岸下斜面一帯に、土器片や石斧等の散布が見られる。包含層は見られず、時期もまだ判然としないが、沖縄貝塚時代中期に属するものかとも考えられる。」

この報告書の中で、多和田氏のいう「中の御嶽貝塚」は「比嘉小学校北方洞穴遺跡（中の御嶽）」なり、1979年の全国遺跡地図^(注7)には「中の御嶽遺跡」と改名されている。なお、「浜貝塚」とあるのは「浜グスク」の誤植である。

5 文化庁の『全国遺跡地図（沖縄）』の刊行

1979年に『全国遺跡地図（沖縄）』が、文化庁文化財保護部から刊行された。^(注7) 実際の調査、執筆等は県教育委員会文化課が行なったものである。このときはじめて「浜貝塚」が登場するが、それは前述したように琉球大学歴史研究会の「桃原遺物散布地」と「浜中学校校庭遺物散布地」のことであることは、後述する沖縄国際大学考古学研

究会の範囲確認調査の結果明らかである。

6 勝連村の『勝連村の原始・古代遺跡を訪ねて』の刊行

1979年、勝連村教育委員会は、勝連村内の主な遺跡について概説した『^(注4)勝連村の原始・古代遺跡を訪ねて』を刊行して、村民に対して埋蔵文化財の普及に努めている。その中で、浜貝塚出土の土器や貝製品が実測図で紹介されている。

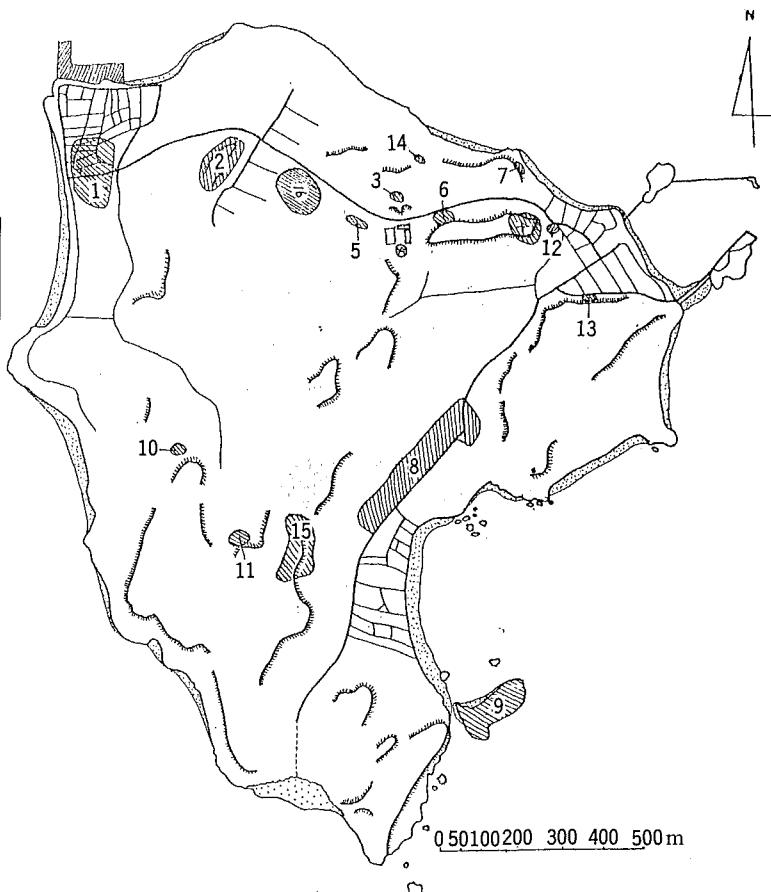
7 沖縄県教育委員会文化課のグスク分布調査

1977～1982年まで断続的に3次に亘って行なわれた「沖縄本島及び周辺離島のグスク分布調査」の成果が、1983年『ぐすぐ』（グスク分布調査報告Ⅰ）として刊行された。その中で、浜グスク（イリグスク）と比嘉グスク（アガリグスク）が紹介されている。略図も掲載されているが、略図中に示されている方位がいずれもずれている。また、比嘉グスクは長楕円形状であるのに、円形に図示されている。

8 沖縄国際大学考古学研究会の調査 沖縄国際大学考古学研究会（学生サークル）

番号	遺跡名
1	浜貝塚
2	浜グスク
3	中の御嶽洞穴遺跡
4	比嘉グスク
5	ミーハンチャー洞穴遺跡
6	比嘉小東遺物散布地
7	浜川洞穴遺跡
8	ソージガーラー南西 畑地遺物散布地（仮称）
9	クバ島遺物散布地
10	アジー洞穴遺跡（仮称）
11	牧場南洞穴遺跡（仮称）
12	比嘉579-1 石器採集地点
13	アガリガーラ付近古銭採集地点
14	はちまん洞穴遺跡
15	兼久西丘陵遺物散布地
16	浜グスク東南畑遺物散布地

15・16は=今回未調査遺跡



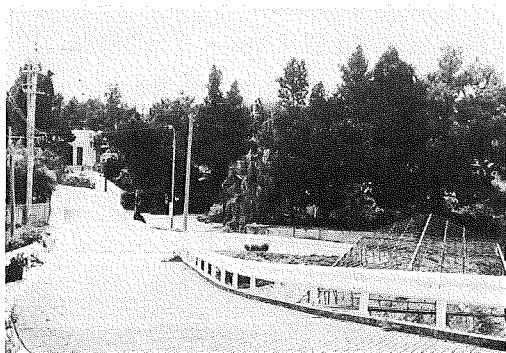
第3図 遺跡分布図(沖縄国際大学考古学研究会作成)

ル）は、1983年9月と12月に「浜比嘉島の遺跡分布調査及び範囲確認調査」を実施し、1984年7月に会報第10号として『浜比嘉島調査報告』^(注9)を刊行している。ガリ版刷りではあるが、採集遺物についての記述や実測図が付いていて、浜比嘉島の考古学調査報告書として最もまとめたものである。ただ遺跡分布図が略図になっているのが残念である。この報告書を中心にして浜比嘉島の遺跡概要を記す。

③ 浜貝塚

「浜貝塚は、浜部落の南に位置し、同部落の南半分をしめる広範囲な貝塚であり、標高約5mの砂丘上に形成されている。時期は沖縄貝塚時代後期に位置づけられ、さらに後期の貝塚としては典型的なものとして知られている。貝塚の現状は、畑地や道路や民家となっている為攪乱が著しく、地表面に多数の土器片が散布している。その為、保存状態はかなり悪いものと思われる。また、拝所より東へ約50mには、当時、泉（カー）として利用したと思われるメーガー（ウブガー）がある。」

遺物は土器片79点、石器1点、貝製品3

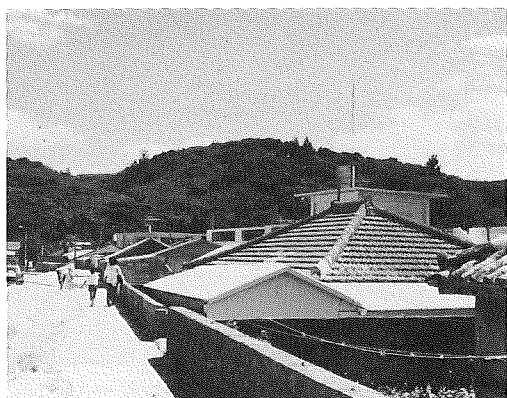


浜貝塚（東から）

点などである。土器口縁部は有文3点と無文6点で、底部は6点である。底部はすべてくびれ平底である。しかし、勝連町教育委員会の緊急発掘調査では第4・5図に示しているとおり尖底土器が検出されている。貝製品はメンガイの有孔製品2点とヒメジャコの有孔製品1点である。

④ 浜グスク

「浜部落の東南側約150m、標高約60mの石灰岩丘陵地の先端部に位置する。遺跡の現状は東南両側の一角に野面積みの石垣が認められるが、崩壊が著しく保存状態は極めて悪い。今回の採集では同グスクの東南



浜グスク（西から）



浜グスクの野面積み石垣（東から）

側の道路沿、及び畠地で遺物が採集された。」

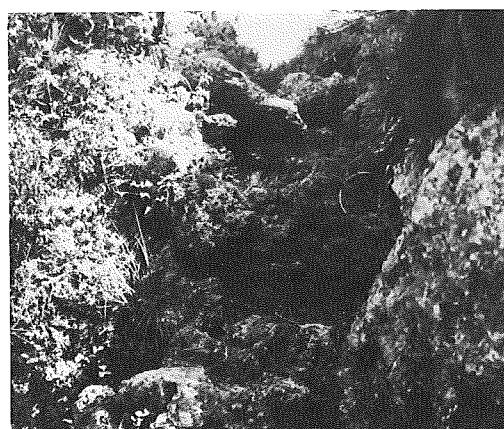
採集された遺物は土器31点、陶器1点、須恵器1点である。土器は口縁外面に平面觀が長楕円形のコブを貼付する滑石製石鍋模倣土器も採集されている。この土器には滑石細片が混入されているようである。

⑤ 中の御嶽洞穴遺跡

「比嘉小学校の北側約130m、標高約60mにあり、百平方メートル位の鍋の底のような凹地に形成されている。地質はマージで、時期は沖縄貝塚時代前期～中期に相当する。」(多和田氏の「中の御嶽貝塚」と思われる)



比嘉グスク（北から）



比嘉グスクの入口（北から）

採集遺物は土器片16点で、その中に肥厚口縁の宇佐式土器が含まれているようである。

⑥ 比嘉グスク

「別名アガリ（東）グスクとも呼ばれ、比嘉部落の旧公民館から南西方向へ約80m、標高44.2mの丘陵上に形成されている。グスクの周囲は断崖となり自然の要塞的なところに占地している。グスクの北側には城門らしきところがあって、グスク内への出入口となっている。この出入口をはさんで左右に野面積みの石垣がめぐっている。」

遺物は青磁外反碗が2点採集されている。1点は無文外反碗だが、あと1点は「数本の沈線が施されている」とあることから、弦文碗と考えられる。

⑦ ミーハンチャー洞穴遺跡

「比嘉小学校の西方約150m、標高約65mに位置し、琉球石灰岩で形成された小崖に立地し、遺跡の周辺はギンネムがおい茂っている。洞穴の入口は南側を向いており、間口の直径約5m、奥行約10mの横穴小洞穴である。沖縄貝塚時代後期終末に属するものだと考えられる。洞穴の内部と外部で遺物が採集できた。」

採集遺物は土器片36点、リュウキュウサルボウとヒメジャコの有孔製品などである。土器の底部は2点ともくびれ平底である。口縁部はすべて無文で、胴部には貝殻条痕が顕著に残っているのがある。

⑧ 比嘉小学校東遺物散布地

「比嘉小学校より東側約75m、標高約40mの石灰岩崖下に立地し、地質は島尻マージ

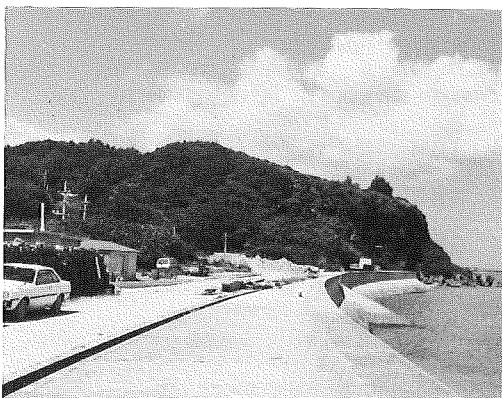
である。時期は沖縄貝塚時代後期終末にあたり、採集された土器は、後期からグスク初頭のものと思われる。」

採集された遺物は土器片50点、すり石1点である。土器の口縁と底部（平底）からみて、グスク系の壺形土器と考えられる。

⑨ 浜川洞穴遺跡

「旧比嘉公民館より北西約140m、標高約12mの海岸沿いに位置する。洞穴入口の高さ約4m、横幅約3m、奥行推定約40mあると思われる。沖縄貝塚時代後期後半の遺跡で、入口付近で土器が多く採集される。近くにはハマガ（ウブガ）があり、当時の人々はそこの水を利用していたと思われる。現在このカーペット所として祀られている。」

採集遺物は土器片39点で、壺形、碗形、鉢形などの器形が見られる。底部は平底が2点報告されている。



浜川洞穴遺跡（東から）

⑩ ソージガ－南西畠地遺物散布地

「同散布地は、今回新しく発見された遺跡で、南海岸からの最短距離約175m地点の

兼久ソージガ－より、兼久部落へ至る道の西側畠地一帯（崎原^{さきばる}）にまで、その範囲は広がり、全長約930mにもおよぶ。標高約4～5mの平地に立地しており、地質は砂まじりの島尻マージである。現在は放地状態の荒地であったり、畠として利用されている。採集された遺物より、時期は、後期～グスクになると思われる。」

採集された遺物は土器片が10点だけで、特徴のある口縁部、底部もないので時期については明確ではない。今回の調査でもほとんど表面採集ができなかった。



ソージガ－南西畠地遺物散布地
(比嘉グスクより望む) (北から)

⑪ 牧場南洞穴遺跡

「浜部落の南方約500mにある牧場をさらに南へ約250mほどいった標高約50mの石灰岩丘陵地中腹にある洞穴内に形成される。同洞穴は北向きに開き、長径が約15mの橢円形を呈している。また、洞穴の奥行きは約60～70mである。遺物が洞穴入口から約15m地点にある15畳程度の平坦部に集中して散布していることから、この平坦地が遺跡の中心である可能性が強い。なお、遺物

はグスク系土器片、魚骨、ウニ数点を採集することができた。」

遺物は土器片が29点採集されている。口縁部と底部を見ると、浅鉢（鍋形）形のグスク土器で、おそらく縦耳の付く土器と考えられる。

II 勝連町教育委員会の浜貝塚調査

浜貝塚内を通る道路及び側溝工事にかかる緊急発掘調査が、1987年と1988年に実施された。これは1978年に側溝工事で一部破壊されたのを受けて実施された緊急発掘調査である。第4図と第5図の遺物は1978年の側溝工事で破壊されたときに採集されたものである。

おわりに

以上概観したように、浜比嘉島の考古学研究は浜貝塚の発掘調査以外すべて表面調査であり、多和田真淳氏、琉球大学考古学研究会、沖縄国際大学考古学研究会の調査以来あまり進展していない。また、多和田氏が発見した「うしとらの竜門洞窟遺跡」「三様洞窟遺跡」「大あぶ洞窟遺跡」「大あぶ洞窟遺跡の隣り洞窟遺跡」「四柱洞窟遺跡」はその後誰も調査していない。現在それを調べようすると、「そのような洞窟は知らない」という。26年の歳月は長く、古い呼び名の洞窟名も忘れられている。

浜比嘉島は洞穴遺跡が多いのが特徴である。洞穴遺跡から出土する遺物はほとんどグスク系の土器であり、その時期に洞穴が

かなり利用されたようである。

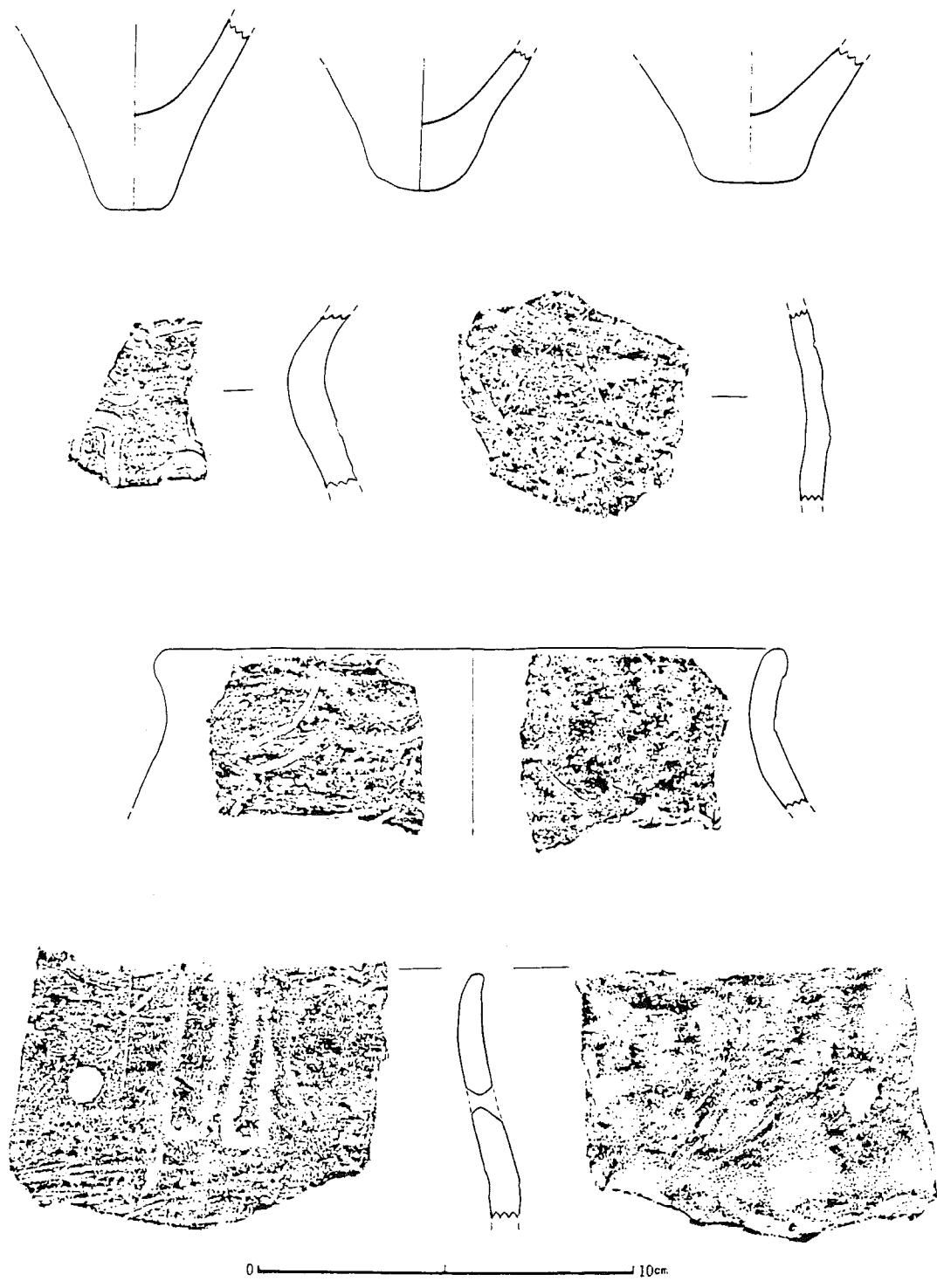
編年を考えると、伊波、荻堂、大山式など沖縄貝塚時代前期の遺跡は現在のところ発見されてなく、中の御嶽貝塚や兼久西丘陵遺物散布地など沖縄貝塚時代中期の遺跡が最も古い遺跡である。そのあと浜貝塚などの沖縄貝塚時代後期へと続き、さらに洞穴遺跡・グスクへと続いている。

グスクは浜グスクと比嘉グスクがあるが、いずれも野面積みの石垣をもつグスクである。採集された中国陶磁器で見ると、14~15世紀のグスクと考えられる。

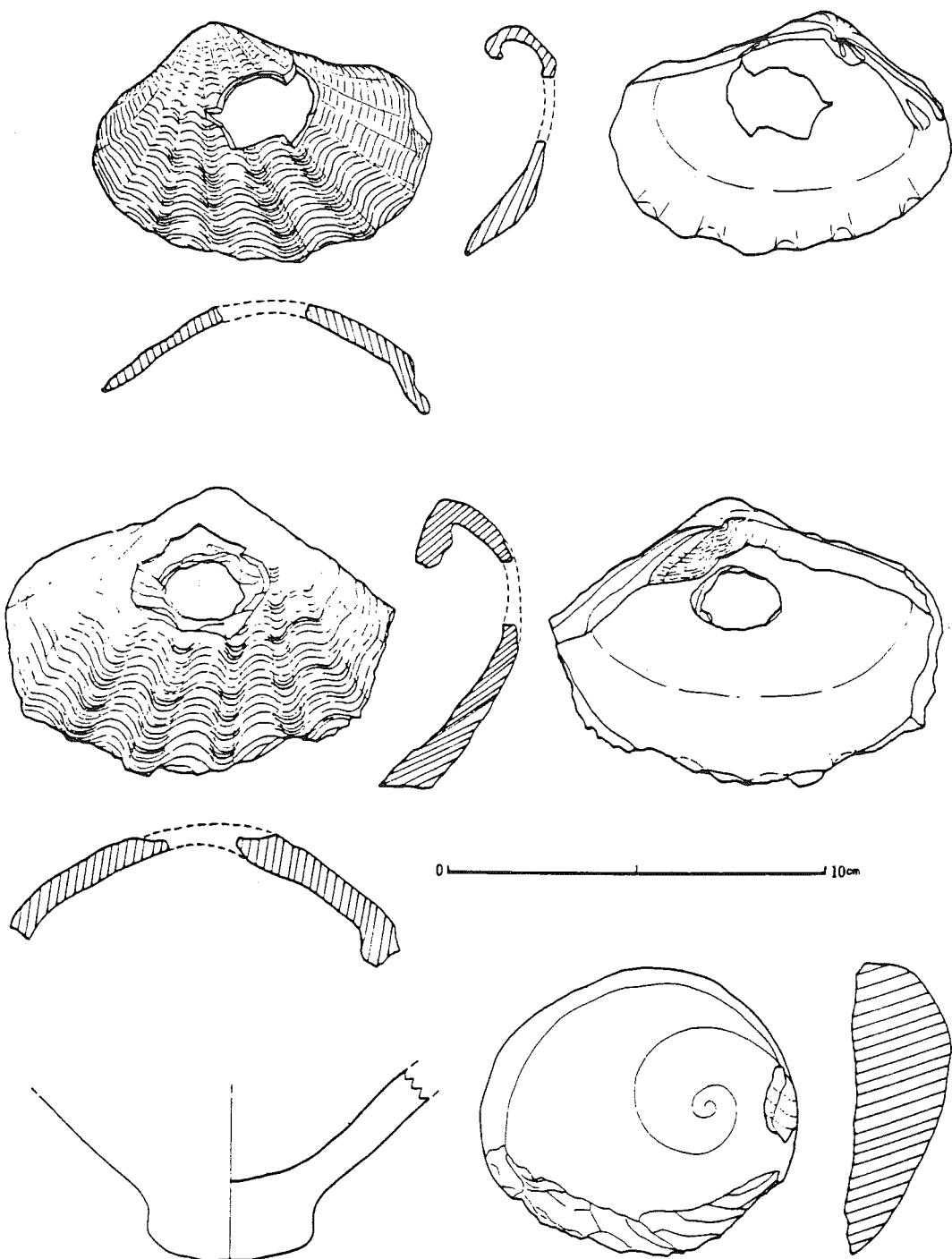
最後に写真の現像・焼付、遺物の実測・トレース等で協力を得た島袋洋、金城亀信、高良美千代の諸氏に謝意を表する。

注

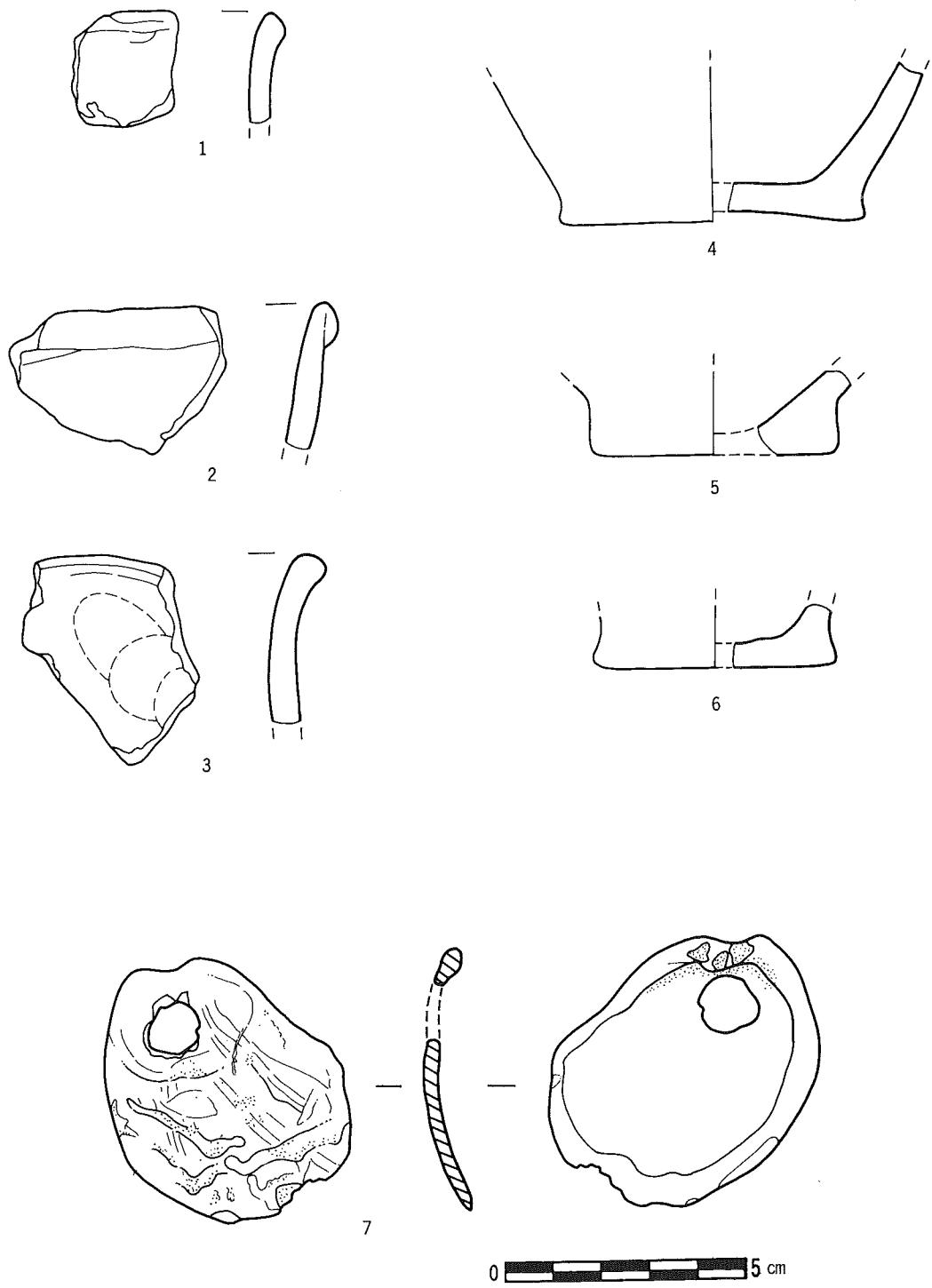
- 1 『全国遺跡地図（沖縄）』 国土地理協会 1968
- 2 多和田真淳『多和田真淳選集』 古稀記念多和田真淳選集刊行会 1980
- 3 『歴史研究』第2号 琉球大学歴史研究会 1966
- 4 當真嗣一『勝連村の原始・古代を訪ねて』 勝連村教育委員会 1979
- 5 金武正紀『熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員会 1978
- 6 『沖縄県の遺跡分布』 沖縄県教育委員会 1977
- 7 『全国遺跡地図（沖縄県）』 文化庁文化財保護部 1979
- 8 『ぐすぐ』（グスク分布調査報告I） 沖縄県教育委員会 1983
- 9 『浜比嘉島調査報告』会報第10号 沖縄国際大学考古学研究会 1984



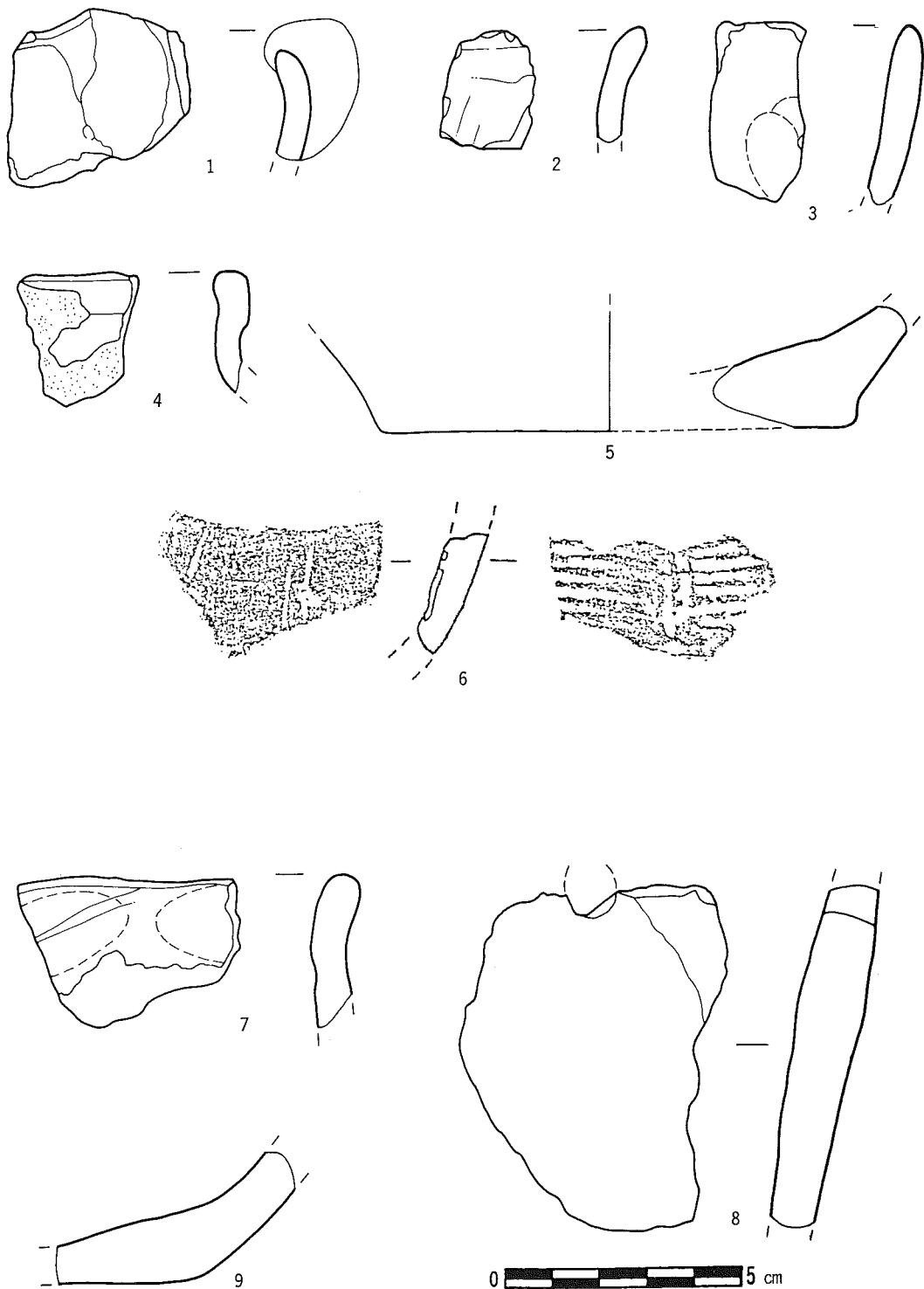
第4図 浜貝塚出土の土器
(「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より)



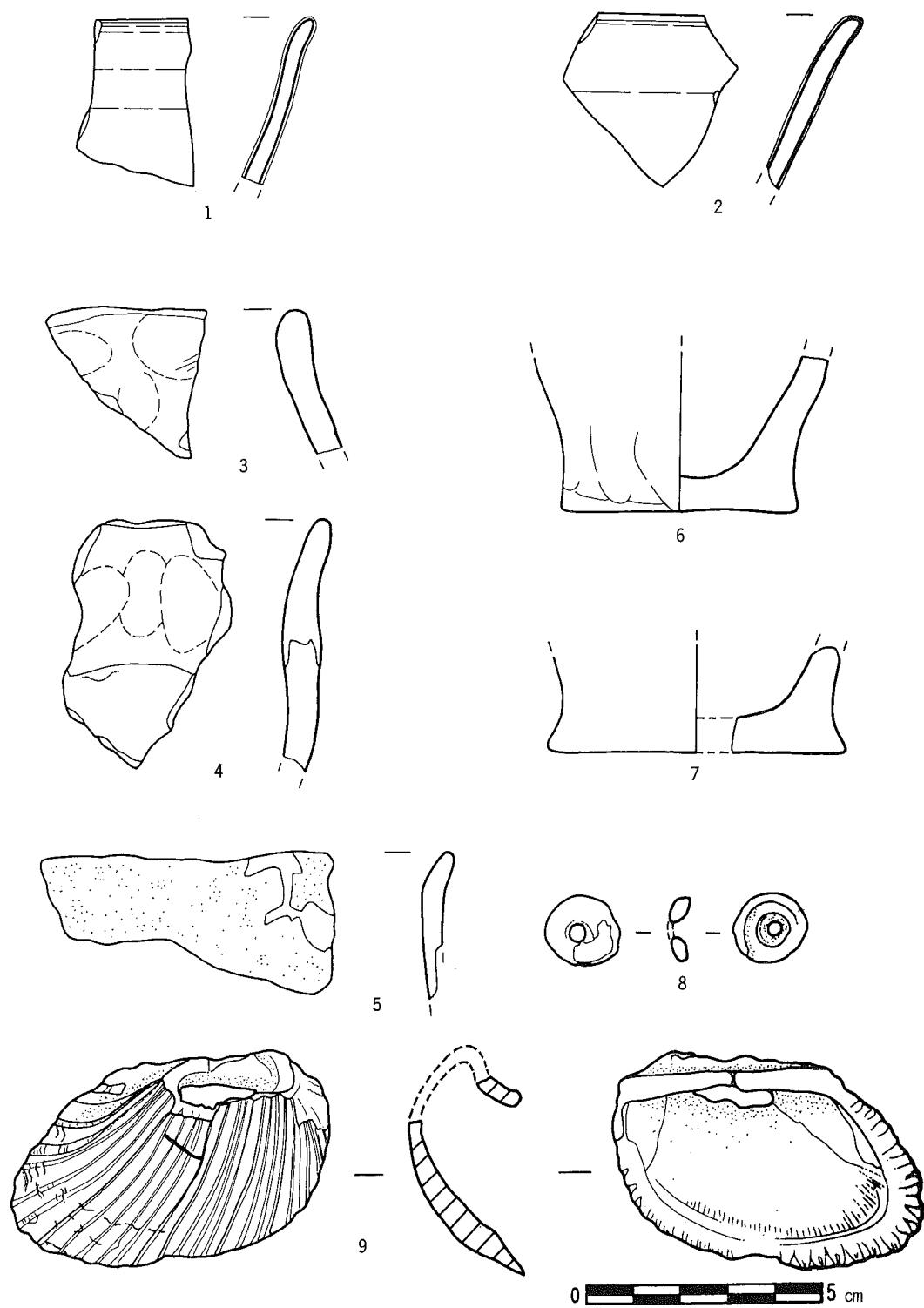
第5図 浜貝塚出土の貝製品と土器底部
(「浜比嘉島の原始・古代を訪ねて」より)



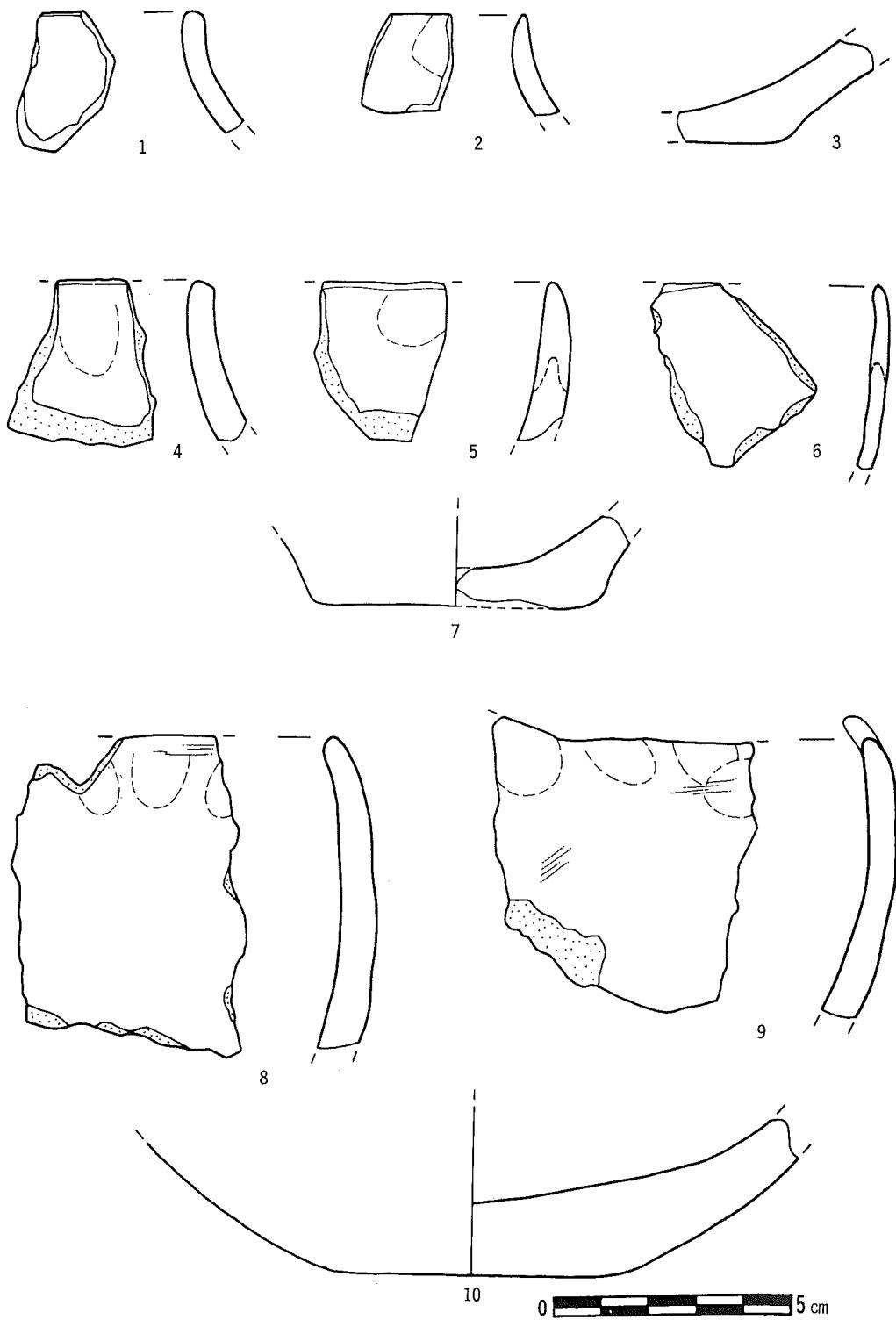
第6図 浜貝塚採集の土器（1～6）、貝製品（7）
〔沖縄国際大学考古学研究会蔵〕



第7図 浜グスク採集の土器（1～5），須恵器（6），中の御嶽洞穴遺跡採集の土器（7～9）
〔沖縄国際大学考古学研究会蔵〕



第8図 比嘉グスク採集の青磁碗（1・2），ミーハンチャ－洞穴遺跡採集の土器（3～7），貝製品（8・9）〔沖縄国際大学考古学研究会蔵〕



第9図 比嘉小学校東遺物散布地採集の土器(1～3), 浜川洞穴遺跡採集の土器(4～7), 牧場南洞穴遺跡採集の土器(8～10) [沖縄国際大学考古学研究会蔵]

浜比嘉島の造網性のクモ類について

千木良 芳範

(沖縄県立博物館)

Spiders from Hamahiga Island, the Okinawa Islands

Yoshinori CHIGIRA

(Okinawa Prefectural Museum)

I. はじめに

浜比嘉島の動物に関する報告は、極めて少ない。筆者の知る限り両生爬虫類に関する、高良（1962）と当山（1981、1984）の報告があるだけである。その他の動物群についてはわずかに当山（1984）の中に方言調査と関連した哺乳類、鳥類の記録があるだけである。真正クモ類についての報告は、筆者の知る限りまだない。

沖縄諸島の真正クモ類については、下謝名（1963、1967、1970、1971）、コザ高等学校生物クラブ（1969）、大井（1963）、千木良（1978、1987、1988）らによって、ある程度までの調査が行われている。しかしこれらの大部分は沖縄島における調査であり、沖縄島の周辺の島々における調査は、下謝名（1971）と千木良（1978、1988）があるだけである。すなわち、沖縄諸島のファウナの概要についてはかなり詳細になってきているものの、個々の島々にどのようなク

モ類が生息しているのかといった具体的な内容については、未調査の部分を多く残したままである。

一般に小さな島におけるファウナは単純である。そのため、環境要因との関係を比較解析するには都合がよい。特に主島の周辺に散らばる属島のファウナを、主島と比較解析することによって、それぞれの種の分散力や適応力を類推することができる。その意味で、規模の小さな島における調査は重要なものとなる。

このような観点から、筆者は沖縄諸島の



図1. 浜比嘉島の遠景（宮城島から）

クモ類相の調査を継続している。今回は、1989年度の沖縄県立博物館総合調査の一環として、勝連町浜比嘉島における調査の機会を得たのでここに報告する。

II、調査地の概要

浜比嘉島は与勝半島の東海上約3.0kmに位置し、平安座島からはわずか1.5km程の距離にある。南北に細長い三角形の形状をした小島で、面積は約2.3km、周囲は約6.7kmで、最高海拔は78.7mになる。島の北部に浜、東部に比嘉、南部の平坦地に兼久集落が形成されている。地形は急峻で、浜集落の近くと兼久の集落近くに砂浜があるだけ

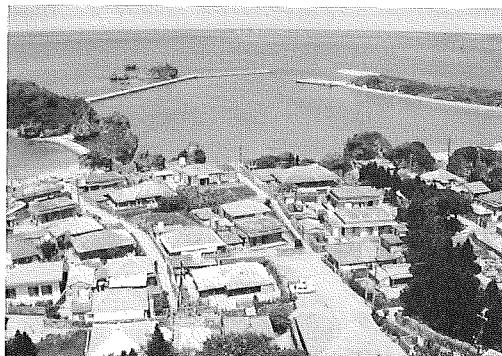


図2. 比嘉グスクから比嘉の集落を見る



図3. カレンフェルトの発達した岩場

で、その他は切り立った崖となっている。

島の全域を琉球石灰岩がおおっており、石灰岩の層は、中央台地でもっとも厚い。また比嘉集落近くでは、沖積層の厚い砂泥層も見ることができる。

集落近くの御嶽やグスクには小規模ながら良好な森が残されている。海岸近くの岩山などには、いくらかの海岸林が残されているが、島全体を相観するとススキとギンネムが優占している。特に島の中央台地の東側一帯は、以前に山火事で焼けたこともありススキを主とした草本類の原野となっている。この台地のあちこちに、大小のドリーネ状の窪地がある。雨水の貯まった窪地は、ヒメガマの生えた湿地となっている。そのようなこともあってか、中央台地の南側は牛の放牧地として利用されている。

地形の割には耕作地は多い。集落に近くの平坦地では蔬菜類や果実類などの栽培が小規模に行われているが、海岸近くの傾斜地や島の中央台地ではサトウキビが栽培されている。島内には川はないが、湧泉は数カ所に認められた。

III、調査方法

調査は1989年4月28日～29日および7月25日～26日の、2回4日間にわたって実施した。島内をランダムに歩き回り、見つけたクモの種名を記録する方法で実施した。島内をくまなく見るために、次々と場所を変えて10カ所で実施した。調査地点は地図上から選択したが、森、草原、路傍、高地、

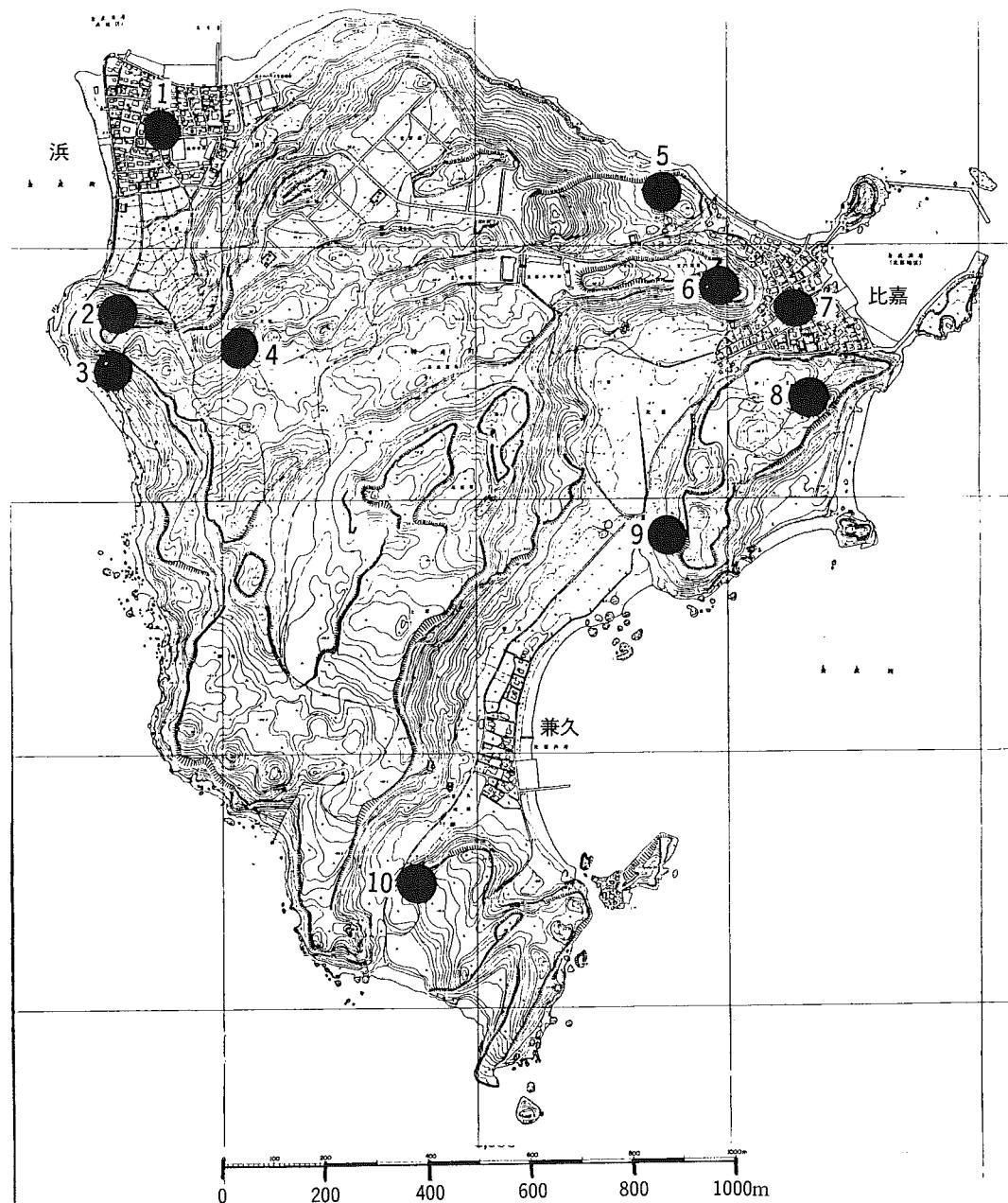


図4. 浜比嘉島における真正クモ類の調査地点

低地など、さまざまな要素を含むように考慮した。各調査点では、特にコードラートを設定することなく、任意の範囲を約1時間調査した。それぞれの調査地点を図4に示し、以下に各調査地点の概略を記す。

ポイント1と7は、それぞれ浜と比嘉の集落内である。いずれの集落も緑が豊かで、集落内を歩きながら、庭木に網を張っているクモを調査採集した。ポイント2は西の御嶽と呼ばれており、浜集落の南にある拝所である。標高49.5mの丘陵地で、琉球石灰岩の上にヤブニッケイ、モクタチバナ、ゲッキツなどからなる森が形成されている。林内では階層構造も認められ、調査した中では、もっとも良好な森であった。

ポイント3は、西の御嶽の南側の海岸林である。標高が低いことを除けば、環境の概況はポイント2と同じであり、植生もポイント2と連続している。ポイント4は中央台地の北西に位置し、琉球石灰岩の台地に発達したギンネム林である。ギンネムの胸高直径は2cm程度で、高さは約3mであった。

ポイント5は、島の北東側の海岸に迫り

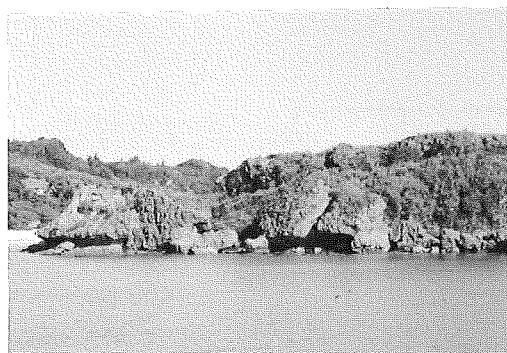


図5. ポイント5あたりの海岸林

出した崖のうえに発達する海岸林である。アダン、ヤブニッケイ、ゲッキツ、などからなる。樹高は3m程で、階層構造も認められない。ここには小規模の鍾乳洞もあつたので、その内部も調査した。

ポイント6は比嘉グスクである。標高約44.2mの丘陵地にヤブニッケイ、ゲッキツ、ギンネム、モクマオウなどからなる林がある。モクマオウの樹高が8m程あるが、その他の樹木の高さは5~6mである。



図6. 比嘉グスク

ポイント8は、比嘉集落の南側の台地上にある林である。海岸近くの台地ということで、風の影響が強く樹高は4~5mほどである。ポイント9は、ポイント8のある台地の南斜面である。谷をはさんで中央台

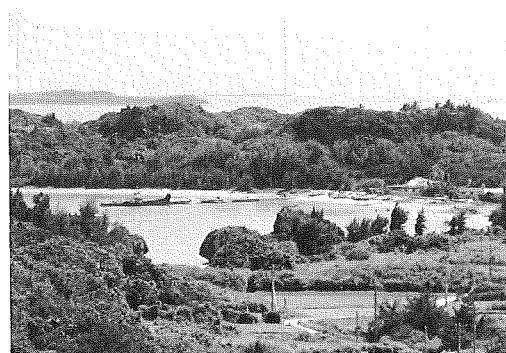


図7. 兼久の集落あたり

地と向かい合う斜面のため、ポイント 8 に比べるといくぶん樹高は高くなっていた。ポイント 10 は兼久集落の南のはずれにある海岸林で、シルミチュウと呼ばれる拝所の近くの海岸林である。

IV、調査結果

浜比嘉島における 2 回の調査で、確認された真正クモ類は 9 科 15 属 19 種であった。これらの概況について、以下簡略に記す。なお各種の和名、学名および配列は千国（1989）によった。

キムラグモ科 *Heptathelidae*

1 キムラグモの一種 *Heptathela sp.*

腹部に 12 枚のキチン質の板を持つ原始的なクモである。キチン板は体節のなごりと考えられ、クモ類や昆虫類、その他の節足動物の祖先につながる形質と考えられている。その意味では、いわゆる生きた化石と呼ばれる動物のひとつといえる。

沖縄にはキムラグモとオキナワキムラグ

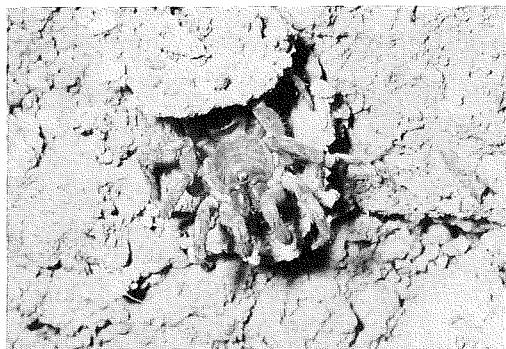


図 8. オキナワキムラグモ（沖縄島にて）

モの 2 種類が生息する。浜比嘉島のものがいずれの種であるのか、まだ判別できていない。ポイント 4 の中央台地で採集されたが、低地域では少ないようである。種の確定をはじめ、今後詳細な調査が必要な種のひとつである。

ウズグモ科 *Uloboridae*

2 ウズグモ

Uloborus varians BOS. et STR., 1906

体長 4 ~ 5 mm の小さなクモで、岩の陰、穴状にくぼんだ場所など、暗い場所に網を張っていることが多い。網に渦巻状の白い帯をつけるので、他と区別することは容易である。ポイント 2 の西の御嶽や、ポイント 5 の洞穴、海岸林等で採集された。

ユウレイグモ科 *Pholcidae*

3 ユウレイグモ

Pholcus crypticolens BOS. et STR., 1906

ウズグモ同様暗がりを好むクモで、細長い足で網に止まり、何かが網に触ると体を上下に揺らす。その様がゆらゆら何かが空中で揺れているようなので、この名がついた。ポイント 5 の洞穴入口で見つかった。

ヒメグモ科 *Theridiidae*

4 ヒメグモ

Achaearanea japonica (BOS. et STR., 1906)

林内の少し暗いところを好む。枝の間などに、不規則に糸を張り巡らしたような網を張る。たいてい網の中央には、枯れて丸まった木の葉がぶら下がっている。クモはその枯れ葉の下面にいる。

ポイント 2 の西の御嶽やホイント 3、ポイント 5 の海岸林、ポイント 6 の比嘉グスクの林でよく見かけた。

5 シロカネイソウロウグモ

Argyrodes bonadea (KARSCH, 1881)

自分で網を張ることをせず、他のクモの網に止まっている。体長 4 mm 程のクモで、網にかかった昆虫のうち、網の主が必要としないほどの小さなものを餌にしている。ポイント 6 の比嘉グスクで見つけたチブサトゲグモの網にいた。

6 アカイソウロウグモ

Argyrodes miniacea (DOLESCHALL, 1867)

この種も自分で網を張ることをせず、他種の網に止まり、網に捕まった小さな昆虫類を失敬している。ポイント 2 の西の御嶽にいたスズミグモの網で採集した。

サラグモ科 *Linyphiidae*

7 ヘリジロサラダクモ

Linyphia oidedicata (HELDINGEN, 1969)

草むらの地面に近いところに、小さな皿を伏せたような形の網を張る。クモは網の

中央に、お腹を上にしてとまっている。ポイント 2 の西の御嶽やポイント 3、比嘉グスクで採集された。

コガネグモ科 *Araneidae*

8 ヤマシロオニグモ

Neoscona scylla (WALCKENAER, 1802)

体長 10 mm 程の小型のオニグモ。腹部の模様にはいろいろのタイプがある。沖縄では林内で見つかることが多い。ポイント 2 の西の御嶽やポイント 6 の比嘉グスクの林で採集された。

9 コガネグモ

Argiope amoena L. KOCH, 1878

南方系のクモで、沖縄では普通に見かける。路傍の木立や草原で、直径 50 cm 程の網を張る。網には X 字を連ねたような白い帯をつける。ポイント 2 の西の御嶽、ポイント 6 の海岸林内で採集された。

10 コガタコガネグモ

Argiope minuta KARSCH, 1879

コガネグモの中でいちばん小さい種。この種も網に X 字を連ねたような白い帯をつける。路傍の草むらで見つかることが多い。西の御嶽、比嘉グスクで見つかった。

11 オオジョロウグモ

Nephila maculata (FABRICIUS, 1793)

日本でいちばん大型のクモ。体長は 50~60 mm、足を含めると全長は約 200 mm にもなる。

沖縄では日当たりのよい林縁部や、林道で多く見かける。ポイント1およびポイント7の集落内、ポイント4の中央台地の路傍、ポイント4およびポイント9の林で見つけることができた。

12 スズミグモ

Cryptophora moluccensis (DOLESCHALL, 1875)

体長20mm程になる中型のクモ。林縁部などに大きな皿を伏せたような網を張る。このクモがつくる網の縦糸と横糸の構成は独特でみごとである。ポイント2の西の御嶽で採集された。

13 ハラビロスズミグモ

Cryptophora unicolor (DOLESCHALL, 1857)

暗所を好むスズミグモ。前出のスズミグモと似た網を張るが、このクモの網には枯れ葉がたくさんついている。クモ本体は、中央の枯れ葉の塊の中に隠れている。比嘉グスクで採集された。

14 チブサトゲグモ

Gasteracantha mammosa C. KOCH, 1847

腹部の皮膚が堅いため、甲羅に包まれたような感のあるクモ。腹部には3対のとげがある。すべてのポイントで見つかった。浜比嘉島で一番普通にみるクモ。

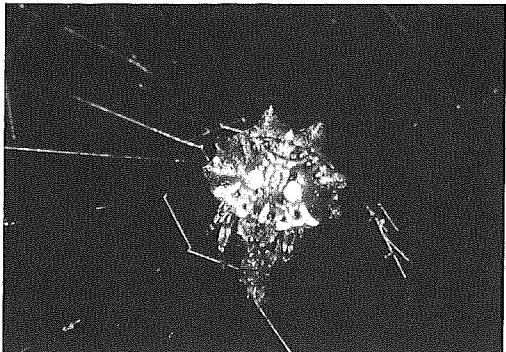


図9. チブサトゲグモ

15 ゴミグモ

Cyclosa octotuberculata KARSCH, 1879

林の中や林縁部の、木立の樹間や枝間に網を張っている。網に食べ残しやゴミをつけるので、すぐ他種と区別がつく。ポイント1や7といった集落内、ポイント2の西の御嶽、比嘉グスク、ポイント8、ポイント9などで見つかった。



図10. ゴミグモ

16 トゲゴミグモ

Cyclosa mulmeinensis (THORELL, 1887)

浜比嘉島でいちばん普通に見るクモ。各家庭の庭木に網を張っている、体長5mm程の小型のクモである。虫眼鏡などで丸い腹部を見てみると、先端に角のようなとげが

一对ついてる。

ポイント1やポイント7の集落内をはじめ、ポイント6の比嘉グスク、ポイント3、ポイント10の海岸林など、島の全域で見ることができた。

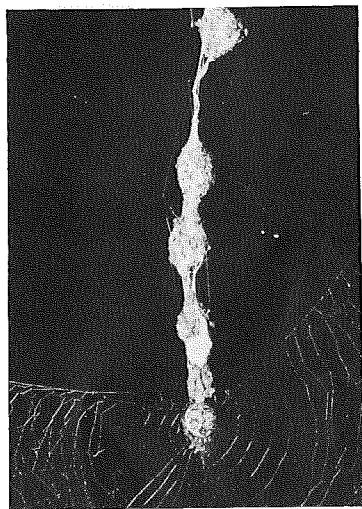


図11. トゲゴミグモ

アシナガグモ科 *Tetragnathidae*

17 チュウガタシロガネグモ

Leucauge blanda (L. KOCH, 1878)

日当たりのいい路傍に網を張る。網の直径は40~50cmで、高さは1mほどである。西の御嶽やポイント3、比嘉グスクで多く見られた。

カニグモ科 *Thomisidae*

18 ハナグモ

Misumenops tricuspidatus (FABRICIUS, 1775)

葉のつけねや花の中に隠れて、訪れた昆

虫を捕まえてしまう。緑色をした小さなクモである。比嘉グスクで木立の枝をゆすつたら落ちてきた。

ハエトリグモ科 *Salticidae*

19 アダンソンハエトリグモ

Hasarius adansoni (AUDOUIN, 1827)

もっとも知られたハエトリグモ。網を張らずに、地表や葉上を徘徊しながら餌を捕まえる。ポイント5の洞穴入口で見つけた。

V. 考 察

今回の結果だけで浜比嘉島のクモ類について論議するには、十分とはいえない。しかしながら、ある程度の概略をつかむことはできそうである。以下に若干の所見を述べ、考察にかえたい。

今回確認されたクモ類のうち、17種は造網性のクモで、残り2種だけが徘徊性のクモであった。昼間の歩きながらの調査であったので、どうしても目撃の対象が造網性のクモに片寄ってしまったことは否めない。今回の調査では、落ち葉の下やリッター内のクモの採集努力はほとんど無きに等しい。今後この分野のクモ類が加わると、浜比嘉島の真正クモ類相はもっと増えるだろう。

沖縄島周辺の、小規模の島におけるクモ類相の調査はそれほど多くはない。それでも若干の記述は見つけることができる。千木良(1978)は屋嘉比島と久場島のクモ類相について調査し、屋嘉比島からは12科13

表1. 屋嘉比島、久場島、瀬底島、および浜
比嘉島における造網性のクモ類の科別種
数。() 内は属数。

科名 \ 島名	屋嘉比島 ^{*1}	久場島 ^{*1}	瀬底島 ^{*2}	浜比嘉島
ウズグモ科	1	1	1	1
ユウレイグモ科				1
ヒメグモ科	4(2)	3(2)	3(2)	3(2)
サラグモ科				1
コガネグモ科	7(4)	6(3)	11(5)	9(6)
アシナガグモ科			2(1)	1
タナグモ科	1	1		
合 計	13	11	17	16

※1) 千木良, 1978から

※2) 千木良, 1988から

属32種、久場島からは10科11属24種を記録している。また千木良(1988)も、瀬底島から4科9属17種の造網性のクモ類を記録している。今回の結果をこれらの島々と比べてみると、屋嘉比島や久場島よりは少ないものの、瀬底島とはほぼ同じ種数となっている。

今回の結果に千木良(1978、1988)の三つの結果を加え、造網性のクモだけについてまとめたのが表1である。これからみると、屋嘉比島では13種、久場島では11種、瀬底島で17種、浜比嘉島では16種となっているので、特に浜比嘉島の種数が少ないというわけではない。またこの表から四つの島における造網性のクモの科別構成をみてみると、屋嘉比島では4科8属、久場島では4科7属、瀬底島では4科9属であるが、浜比嘉島では6科12属であった。それぞれ

の島の調査時期や日数の違いなどもあるが、造網性のクモ類に関する限り、浜比嘉島は他の三つの島に比べて種の多様性が大きいと推察される。これは、主島である沖縄島からの距離、島内の環境要因の多様性と関連しているのであろう。

今回の調査で、特に目についたクモはチブサトゲグモとトゲゴミグモ、オオジョロウグモの三種であった。特に集落内の庭木には、必ずといっていいほどこの3種が網を張っていた。特に定量調査を実施したわけではないが、浜比嘉島の造網性クモ類の優占種はこれらの種になるであろう。このうちチブサトゲグモとトゲゴミグモは、沖縄の他の地域でも普通にみられ、日向な場所を好み、比較的きびしい環境のもとでも生活することができる。そのため沖縄島のような大きな島でも、海岸林内や海岸の岩場に生えるわずかな植物の枝間にも網を張っているのをみる。これらのクモ類が優占することが、島嶼のクモ類相の特徴のひとつなのであろう。

浜比嘉島で確認された種は、すべて沖縄島と共通する種である。バルーニング(気流に乗って空を飛んで離れた場所にいく)という独特の分布法を持つクモ類にとって、沖縄島と浜比嘉島程度の距離は問題とはなり得ないのであろう。そのため沖縄島で普通に見かける種が、浜比嘉島でも確認されている。しかしキムラグモについては、特筆する価値があるかもしれない。キムラグモは地中生活をする徘徊性のクモで、他のクモ類のように空を飛んで分布を広げるこ

とはしない。そのため海峡の存在は、キムラグモの分布にとっては大きな意味を持つ。それはまた、浜比嘉島の地史を解明するうえでの貴重な材料のひとつとなる。

沖縄島にはキムラグモとオキナワキムラグモの2種が知られている。浜比嘉島で採集されたキムラグモの一種はオキナワキムラグモである可能性が強いが、明解な判断を下すにはいたっていない。浜比嘉島のキムラグモの一種が、どちらの種であるのかは、浜比嘉島の地史やキムラグモの種分化などと絡めて興味深い今後の課題である。

VI、引用文献

- CHIGIRA, Y. 1976. Notes on the Spider Fauna at a Coastal Limestone area in Okinawa Island. *Ecol. Stud. Nat. Cons. Ryukyu Isl.*, II, 101-112.
- 千木良芳範, 1978. 屋嘉比島と久場島(沖縄諸島)の真正クモ類. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集, 171-176.
- 千木良芳範, 1988. 冬季の瀬底島における造網性のクモ類について. 沖縄県立

- 博物館総合調査報告書V-瀬底島一, 23-32.
- 千国安之輔, 1989. 日本クモ類大図鑑. 308 pp. 東京, 偕成社.
- コザ高等学校生物クラブ, 1969. *Forschung No. 1*
- 大井良次, 1963. 沖縄本島・西表島のクモ. *ATYPUS No.29*, 15-17.
- 下謝名松栄, 1963. 沖縄本島の蜘蛛(I). *ATYPUS No.28*, 22-34.
- , 1967. 琉球列島のクモ相について. *沖縄生物学会誌*, 4(6), 16-25.
- , 1970. 動物の地理分布をどう指導したらよいか. *沖縄生物教育研究会誌*, 4, 38-68.
- , 1971. 奄美大島・久米島及び宮古島の真正クモ類. *ATYPUS No.57*, 19-31.
- 高良鉄夫, 1962. 琉球列島における陸生蛇類の研究. *琉球大学農家政工学部学術報告*. (9), 1-202.
- 当山昌直, 1981. 沖縄群島の両性爬虫類相(I). *沖縄県立博物館紀要*, (7), 1-8.
- , 1984. 浜比嘉の動物方言. やちむん 第8号, 53-61.

浜比嘉島の祭場と儀礼

大 城 學

(沖縄県立博物館)

Religious Service Sites and Ceremonies of Hamahiga Island

Manabu OHSHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

浜比嘉島は、沖縄本島中部、勝連半島の東方海上約5kmに位置する。方言で〈バマヒジヤ〉という。勝連町に属し、浜と比嘉の2字を構成する。浜は島の西部にあり、比嘉は島の東部に位置する。浜の北西部に浜集落、比嘉の東北部に比嘉集落、比嘉の南東部に兼久集落（比嘉のヤードワイ〈屋取〉）がある。生業は農業と漁業が主体であるが、本島に出かけ建設業や土木業に従事している方もある。

人口は1990年3月末日現在で、浜377人、比嘉（兼久を含む）246人で、合計623人。小学校、中学校それぞれ1校ずつあり、小学校は比嘉にあり（勝連町立比嘉小学校）、中学校は浜にある（勝連町立浜中学校）。

本島とは船で結ばれている。浜比嘉島と本島の屋慶名港間に定期船が就航している。浜へは、恵比寿丸が1日1往復、はまゆう（快速船）が3往復している。比嘉へは、

かすみ丸が2隻就航していて、1日都合3往復している。

浜比嘉島には有形、無形のさまざまな民俗現象があるが、本稿では、祭場（拝所）と儀礼（年中祭祀）をとりあげる。本題にはいる前に、浜比嘉島に伝承されている沖縄の創世神話「アマミキヨ」に関する紹介しておきたい。

まず、沖縄の創世神話のことが記載されている文献『おもろさうし』（1531～1623）、『琉球神道記』（1608）、『中山世鑑』（1650）、『中山世譜』（1724）、『球陽』（1745）によると、アマミキヨ（シメリキヨはアマミキヨの対語）は国土を創造した神である、ということである。アマミキヨは、はじめ久高島に上陸したが、やがて対岸の知念半島の斎場御嶽の地に住みついたといわれている。さらに西にすすみ、知念森城、玉城城を築いたという。このように、アマミキヨは久高島を中心とする知念半島が活躍の舞台であったようだが、実は、浜比嘉島にも

I. 祭 場

アマミキヨの伝説があり、それにまつわる史跡がある。

浜比嘉島では、アマミキヨは、はじめ津堅島に上陸したが、水がなく住めないということで浜比嘉島に渡ってきて住みついた、と伝えられているのである。

これらの資料から、アマミキヨは個人をさしているのではなく、民族的な集団をさしていることがわかる。〈アマミ〉は沖縄人が悠遠のむかし住んでいたと考えられる異郷の地、つまり祖先伝来の発祥地を意味することばである。〈アマミ〉に住んでいた人たちが〈アマミキヨ〉であり、沖縄の人たちと同族であると考えられている。アマミキヨは知念半島のみならず、勝連半島でも活躍していたのである。

本稿で詳細にふれることはできないが、アマミキヨと関わりのあるオタカベ、ウムイ、ミセセル、ティルクグチなどの神歌をみてみると、アマミキヨは前述したように創世神で、国つくり、島つくりをしただけでなく、じつは稻作（農耕）と深く関わっているということがわかる。そのことからアマミキヨ族は、浜比嘉島を足がかりにして、稻作を勝連半島、与那城、具志川あたりへと広めていたであろう推測できるし、同じように、久高島から知念半島へ渡ったアマミキヨ族はそこを足がかりにして、知念、玉城へと稻作を広めていったであろうと考えられるのである。

『琉球国由来記』（1713）に記載されている浜比嘉島の御嶽は次のとおりである。

マサゴロヨリアゲ嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

ツチホシキ嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

脇山嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

赤岸ノ嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

久場島ノ嶽

神名、マネヅカサノ御イベ

比嘉城嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

アマミゾ（ヅ）嶽

神名、イシヅカサノ御イベ

右七箇所、濱比嘉巫祟所。

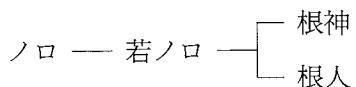
この7つの御嶽（拝所）は、以下に記すように、現在の拝所の名称とは異なっている。本稿では、現在の信仰の対象になっている拝所について調査した。

[1] 比嘉

比嘉には、現在、ムラの祭祀（ムラウガミ）にかかる拝所が12か所ある。①アマミキヨ、②シロミキヨ、③ソージ御嶽、④久場島御嶽、⑤ヌル殿内、⑥ヌル墓、⑦バン殿内、⑧地頭代火の神、⑨エーグチ神屋、⑩タイラ神屋、⑪ソージガー（井泉）、⑫ハマガー（井泉）がそれである。そのなかから、(1)アマミキヨ、(2)シロミキヨ、(3)地頭

代火の神、(4)久場島御嶽、(5)ソージ御嶽について、その現況を記すこととする。

ところで、比嘉の神役組織を図示すると次のようになる。



ノロは当山門中、若ノロは新門門中、根神は宣保門中、根人は平良門中か玉城門中からそれぞれひとりずつ選出される。

(1) アマミキヨ

アマミキヨを祀ったという墓が信仰の対象になっている。アマミキヨのことを比嘉の方言でアーマンチュー、アマミチュー、あるいはアマンヂともいっている。アマンヂというときは、アマミキヨの墓のある小島全体をさしている場合がある。

アマンヂ島は、比嘉集落の北側、旧船着き場の東側にある。堤防を兼ねたコンクリートの道で比嘉集落とつながっている。墓は大きな岩の割れ目に形成された洞窟を利用してつくられ、以前は入り口に野面積みの石を積んだだけで、石垣の隙間から洞窟内に散乱している人骨がみえたという。明治20年ごろ、野面積みの石垣を切石にかえて積みなおし、墓の形を整え、大正のはじめごろにコンクリートづくりに改築して、現在に至っている。

墓の前に香炉が1個ある。旧暦の正月の元旦と旧暦6月25日にムラの祭場として拝んでいる。『琉球国由来記』掲載の「アマミゾ(ヅ)嶽」がこのアマミキヨの拝所であ

る。

(2) シロミキヨ

シロミキヨはアマミキヨの対語であると前述したが、比嘉ではシロミキヨを祀った拝所がある。シロミキヨのことを方言ではシルミチュー、あるいは単にシルといっている。

シロミキヨは、比嘉集落の南東約1.5kmのところにあり、比嘉集落の次男、三男が分家してつくった兼久集落に隣接している。兼久集落をぬけて、海岸の方をさらに南へ行く。木立のなかを100mほど入ったところに井泉があり、さらに奥へ進むとコンクリート製の鳥居がある。鳥居をくぐり抜けると長い階段がある。階段をほぼのぼりきったところにもうひとつの鳥居がある。ふたつの鳥居をくぐり抜けて、しばらく階段をのぼると広場がある。階段は、108段もある。この階段（参道）は、1955年に改修され、鳥居は1963年に改修されている。広場の右奥に洞窟があり、その中に瓦葺きの祠がある。祠の入り口に「大正六年旧六月十日神祠落成」と記されている。祠にはアミルサッジのドアがついている。祠の前にローソク立てが4台、香炉が1個ある。祠の左手前に石匂があり、水がしたたり落ちている。下の岩にたまつた水の多寡によって、豊作、豊漁の吉凶を占うということである。

(3) 地頭代火の神

比嘉の旧公民館向かいにある。コンクリート製の祠がある。祠は、1985年12月13日改

修。祠の前は4m×4mの広場になっていて、広場の端は石垣で囲ってある。祠の中にはコンクリート製の石3個、香炉2個、コップ2個が置かれている。

(4) 久場島御嶽

『琉球国由記』に「久場島ノ嶽」とある。兼久集落の入り江の南端に浮かぶ島が久場島で、無人島である。この久場島の北端の岩の上に、久場島御嶽の祠があるというが、今回は島へ渡って確認することができなかつた。久場島御嶽の遙拝所（ウトゥーシ）が兼久集落の北部にある。

(5) ソージ御嶽

比嘉集落と兼久集落のほぼ中間地点に小高い山があり、その山頂付近にソージ御嶽の祠があるというが、今回は確認できなかつた。その山の麓（兼久集落側）に、ソージ御嶽の遙拝所がある。遙拝所はコンクリート製の祠で、祠の中はジャリを敷き詰めてあり、奥の壁の前にコンクリート製の香炉1個とシャコ貝の貝殻1枚が置かれている。

[浜]

浜には、現在、ムラの祭祀にかかわる拝所が9か所ある。①東の御嶽（シヌグ堂）、②西の御嶽（シリギチャ一御嶽）、③ビジュル神、④地頭代火の神、⑤サングワチャーラー（龍宮神）、⑥アガリガー、⑦ウブガ一（前ヌカ一）、⑧シードガ一（上ヌカ一）、⑨ユチャガ一（吉田ガ一）。⑥から⑨は井泉である。そのなかから、(1)東の御嶽、(2)西

の御嶽、(3)ビジュル神、(4)地頭代火の神、(5)ウブガ一、(6)シードガ一、(7)ユチャガ一について、その現況を記すことにする。

(1) 東の御嶽（シヌグ堂）

浜集落の北東側に位置する。アガリガ一（自然石を利用した井泉で、手前はコンクリートを敷いて囲ってある）の前を通って50m程行くと木の生い茂った杜がある。杜の中に入り、左手に進むとコンクリート製の祠がある。祠の中に仏像が1体あり、仏像の前に香炉が1個ある。この杜の中の右手には、自然石とブロックを積んだ階段があり、それを10m程のぼると墓のような形態をした拝所があり、香炉が1個置いてある。2m四方の庭にはジャリを敷き詰めてある。

(2) 西の御嶽（シリギチャ一御嶽）

ムラの人たちは、シリギチャ一御嶽と称することが多い。

浜集落の南側約200mのところに位置する。杜に入ると庭がある。庭の右側に階段があり、それをのぼると左右に分かれる。左の階段をのぼって行くとビジュル神の祠があり、右の方の階段をのぼっていくとシリギチャ一御嶽の祠がある。祠の前はジャリを敷き詰めてある。祠の中に香炉が1個あり、香炉の左右に貝を2枚ずつ伏せてある。祠には「昭和拾年旧拾月改築」と記してある。

(3) ビジュル神

西の御嶽（シリギチャ一御嶽）と同じ杜

の中にある。社の中に入ると庭があり、その右側の階段をのぼっていくと、階段はさらに左右へ分かれる。右側をのぼっていくと、シリギチャ一御嶽の祠があり、右側の階段をのぼるとビジュル神の祠にたどりつく。ビジュル神の祠の前は2m×3mの庭があり、ジャリを敷き詰めてある。祠の奥の壁はコンクリートが塗られており、中央下の方にコンクリートの蓋がはめ込められている。香炉はない。

(4) 地頭代火の神

浜公民館の隣にある。鳥居があり、それをくぐり抜けると、左右に灯籠が立っている。奥に祠がある。その中に、表に「奉納」と書かれたコンクリート製の台があり、左右に2個ずつ（計4個）の香炉がある。祠は、昭和43年12月に改築されたものである。旅に出るときは、地頭代火の神で祈願することが習慣となっている。

(5) ウブガー（前ヌカ一）

井泉。浜集落から比嘉集落へ通じる道路の、浜集落を出たところにある。水量は豊富のようである。コンクリートで囲って水を貯めている（昭和58年改築）。表側にはクロトンを植えてある。

(6) シーローガー（上ヌカ一）

井泉。浜集落の南東側の小高い丘にある。水が豊富で、コンクリートで囲って水を貯め、ポンプで汲み上げて農業用水に利用している。コンクリート囲いの右側に、香

炉を1個置いてある。

(7) ユチャガ一（吉田ガ一）

井泉。浜集落から比嘉集落へ通じる道路の、浜集落からの坂をのぼりきったあたりから30m程南へ行ったところにある。コンクリートの祠があり（「昭和56年5月吉日」と記されている）、周りは雑木におおわれている。祠の後方に貯水タンクがあって、その周りは金網で囲ってある。

II. 祭 祀

①浜、比嘉の集落レベルの年中祭祀を中心、その概要を記す。そのなかで、実際に見学したのは比嘉の豊年祭である。

②月日はすべて旧暦である。

③とくにことわらないかぎり、祭祀は両字共通の内容である。

(1) 正月

1月1日。浜はウブガ一から、比嘉はハマガ一から若水を汲んでくる。家族の健康、豊饒、ムラの弥栄を祈願するため、神女を中心に、各家からひとりずつ参加して拝所廻りをする。

(2) ハチウクシ

1月2日。花米を持って行き、畑ではハチバル、船ではハチウクシを行う。畑では鍬を2、3回入れ、帰宅して農具を手入れして豊作を祈願する。船には松の枝を立て

て、船靈を祀り、航海安全と大漁を祈願する。

(3) ミッチャンサク（ミッチャヌスク）

1月3日。カミニントウともいう。火の神が天から降りていらっしゃるといい、各家の台所の火の神、むらの地頭代火の神で神迎えの祈願を行う。

(4) ナヌカンシャク（ナヌカヌスク）

1月7日。正月の飾りを片づけて、のちほど、御飯と豚肉7切れを仏壇に供える。

(5) ジュールクニチ

1月16日。過去1年間に死者の出た家（ミーサー）では墓参りをする。親戚や字民はミーサーの家に行き、焼香する。

(6) ハチジュリー

1月17日。公民館の総会および新年会を催す。

(7) クシユクイ

2月2日。農作業を休み、豊作祈願をする。この時期は、大豆を蒔き終えるころである。

(8) ウマチー

2月15日。豊作祈願。この日、針や刃物を使うことを忌みきらう。

(9) シマクサラー

2月15日以後。悪靈・災厄祓い。山羊を

つぶし、肉は煮て食べ、骨は注連縄に結わえて、集落の出入口に張りめぐらす。山羊をつぶさないときは、ニワトリをつぶしている。

(10) ハマウリ

3月3日。お重に御馳走を盛り、ヨモギ餅と一緒に献饌し、健康祈願をする。龍宮の神を拝む。潮干狩り。

(11) ウマチー

3月15日。豊作祈願。

(12) シーミー

3月15日ごろ。清明祭。先祖供養。墓参りをする。

(13) アブシバレー

4月15日ごろ。農作物の害虫駆除。かつては、芭蕉の葉と竹で作った舟に、畑からとってきた害虫をのせて、海へ流していた。

(14) ユッカヌヒー

5月4日。ハーリー（舟漕ぎ競漕）を行い、航海安全と大漁祈願を行う。

(15) ウマチー

5月15日。ウフバナウマチーともいう。豊作祈願。

(16) ウイミー

6月14日。折目。

(17) 6月15日。豊作祈願。

(18) 豊年祭

6月24日・25日。

[比嘉の豊年祭]

24日、午後から綱引きを行い、夜はウスデークを踊る。ムラを東西に分け、祭祀集団を形成する。

比嘉の綱は、前年に使用したものを補修して使う。ウスデークの稽古は20日ごろから行うようである。東はカジマヤーグワーで稽古を行い、西はナカミチで稽古を行う。いずれも夜9時からはじまる。

夕方6時すぎ、公民館からの合図で、東西とも旗頭を先頭にガーエーの婦人（仮装している）、綱の順で〈道ジュニー〉を行う。綱は、下から棒を通して20～30人担ぎ、耳（綱の先端）に小学生の男子が2人乗る〈支度〉。15分程で東西とも道ジュニーを終え、綱を引く場所〈ナカミチ〉に集合する。綱を威勢よく持ち上げて、ガーエー歌もうたわれ、にぎやかにガーエーが続く。しばらくして綱をおろし、棒をとりのぞき、耳にのっていた男子2人もおりる。そして、東西の綱寄せがある。中央に白線を引いてある。15分程で白線まで綱を寄せ、耳を合わせてカンチナ棒（カヌチ棒）を貫いて、綱を引く。綱は1回だけ引かれる。ちなみに1989年は西ムラが勝った。勝った西ムラは、綱を持ち上げてガーエーし、よろこびを表現する。綱を片づけ、綱引きは終わる。

夜9時半、ノロ家にて二歳踊とウスデークが踊られる。今年（1989）は二歳踊は踊

られず、音曲のみ演唱された。かぎやて風節、豊年口節、揚作田節の3曲である。ウスデークは西ムラ、東ムラの順で踊られた。ウスデークは小学生以上の女性が踊るが、子供たちはユカタを着け、大人は紺地の絣を来て、紫帯をしめる。太鼓を打つ者はフロシキで頬被りをする。踊りの隊形は鼓打ちが先頭になり、2列縦隊になる。ウスデークの歌曲は、西ムラが①スリー東節、②豊かなる節、③伊集の木節、④打ち鳴らし節、⑤ヨー加那ヨー節、⑥いそーさ節の6曲で、東ムラが、①スリー東節、②はるんかてい節、③打ち鳴らし節、④しゅどうん節、⑤ヨー加那ヨー節、⑥いそーさ節の6曲である。

ウスデークを踊り終えると、ノロ家を出る。そのあと根家や元家など数か所でも同じように、二歳踊りとウスデークを踊り、最後はナカミチで踊る。深夜までムラ中にぎわっている。

ここで、〈綱引きガーエーの歌〉と、東西の〈ウスデークの歌〉の歌詞を紹介しておく。綱引きガーエーの歌は、東西で交互にうたわれる。ウスデークの歌は、東西ともはじめにうたわれる曲よりも後半でうたわれる曲の方がテンポが早く、おしまいはカチャーシを踊る。

歌詞は現地の発音ができるだけ忠実に反映するために、かな表記にした。歌詞の表記は、対句部はひらがなを、反復句（囃子の部分）はカタカナを用いて区別する。対語訳は省略した。

なお、以下に記載する歌詞は、筆者の調

査ノートをもとにしたが、吉本清宣氏の資料によるところが大きい。貴重な資料を提供していただいた吉本氏に深甚なる敬意を表したい。

〈綱引きガーネーの歌〉

1. うるらちんちゅらさ

あしばちんちゅらさ
くりなちゅるうやや
かみるやてる
ササッササッサ

2. いりぬなかみちに

みぐいとうーるさぎてい
くりがあかがりば
みるくゆがふ
ササッササッサ

3. いりぬあんぐわーたや

いちまいむしるににんずなよ
あがりにせぐわーたが
いちちゅぐとう
ササッササッサ

4. ちなひかんまーるや

かながなとうあしり
あねるちなひきば
ちむぬかわてい
ササッササッサ

5. いりぬにせぐわーたや

ひらいめーぬにりがきがさ
しるわかち
かんだばーぬうしる
ササッササッサ

6. あがりにせぐわーたや

しまぐみぬんぱい

あさゆはんだまぬ

くがぬうしる

ササッササッサ

7. ちゅーぬゆるまかち

じまんすなあばぐわー
あちゃぬゆるからや
すんちくるさ

ササッササッサ

8. いりとうあがりとうや

はしるひざみとる
ちむぬかわたしや
ちなぬゆいる

ササッササッサ

9. あんゆしやゆくし

いちわいるやゆる
あんゆしやはなぬ
さかばでむぬ

ササッササッサ

10. あがりにせぐわーたや

ちむくんぞぬはごさ
いりぬなかみちに
つひさんくますなよ
ササッササッサ

11. いりぬゆみなとてい

かんくりさあむぬ
むてるさかぢちや
むるちやらせ

ササッササッサ

12. あねるあがむていに

わねいつみあんま
をうとうままでむぬ
いかねなゆみ

ササッササッサ

13. あがりゆみなゆせ
 いくたいるやしが
 いりぬゆみなゆせ
 あまたまんでい
 ササッササッサ
- ウスデークの歌〈西〉
 〈スーリー東節〉
1. スーリー
 はなぬいりむていや
 スリサーラ
 だんじゅとうゆまりる
 スリサーラスーライ
 ちゅぢりみやらびぬ
 スリサーラ
 なだるちゅらさ
 スリサーラスーライ
- 〈豊かなる節〉
1. ゆたかなるみゆぬ スリ
 しるしあらわりてい
 スンダスーリササッサ
2. あみちゅぬみぐみ スリ
 とうちんたがわん
 ウンダスーリササッサ
3. はるんかていみりば スリ
 うくまみぬかばさ
 スンダスーリササッサ
4. ゆびゆだるじゅりぬ スリ
 にういぬかばかばさ
 スンダスーリササッサ
- 〈伊集の木節〉
1. んじゅぬきーやゆかてい ハーリ
- ましらヨーはなさちゅい ハーリ
 2. わみんヨーンじゅぬぐとう ハーリ
 ましらヨーさかさかな ハーリ
 ヒヤルガーヒーササッサ
 〈打ち鳴らし節〉
1. うちならしヨーならし
 ヒヤールガーヒーササッサ
2. ゆちだヨーきわならし
 ヒヤールガーヒーササッサ
3. ならすゆちヨーだきぬ
 ヒヤールガーヒーササッサ
4. うとうぬヨーちゅらちゅらさ
 ヒヤールガーヒーササッサ
 〈ヨー加那ヨー節〉
1. ヨーカナヨー
 あたいをうぬなかぐヨー
 ましらふいちさらち
 ハルヨーンゾーヨ
 やまとうめーるさとうが
 ヨーカナヨー
- どうんすはかま
 ハルヨーンゾーヨ カナヨースーリ
 〈いそーさ節〉
1. いそさふくヨーらしゃヨーハリー
 なちとううり
 ヨーへイヨージントヨー
2. ゆくぬふくヨーらしゃやヨーハリー
 なまどうやゆる
 ヘイヨーヤユルヨー
- ウスデークの歌〈東〉
 〈スーリー東〉
1. スーリー

- あがりんかてい
スリサーラ
とうびゆるあやはびる
スリサーラ
まじゆまていはびる
スリサーラ
いやーいたぬま
スリサーラ
〈はるんかてい節〉
1. はるんかていみりば スリ
うくまみぬかばさ
スンダスースリササッサ
2. ゆびゆだるじゅりぬ スリ
にういぬかばかばさ
スンダスースリササッサ
3. なぐぬうふがにく スリ
うまはらちいそさ
ウンダスースリササッサ
4. ふにはらちいそさ スリ
わうらどうまどうまい
スンダスースリササッサ
〈打ち鳴らし節〉
1. うちならしヨーならし
ヒヤールガーヒーササッサ
2. ゆちだヨーきわならし
スラージャンナヨーササッサ
3. ならすゆちヨーだきぬ
ヒヤールガーヒーササッサ
4. うとうぬヨーちゅらちゅらさ
スラージャンナヨーササッサ
〈しゅどうん節〉
1. しゅどうんヨーながはまに ハーリ
うちやいふいくなみぬ ハーリ
2. しゅどうんヨーみやらびぬ ハーリ
みわれヨーはぐはぐち ハーリ
ヒヤールガーヒーササッサ
〈ヨー加那ヨー節〉
1. ヨーカナヨー
あたいをうぬなかぐよー
ましらふいちさらち
ハルヨーンゾーヨ
やまとうめーるさとうが
ヨーカナヨー
どうんすはかま
ハルヨーンゾーヨ カナヨースーリ
〈いそさ節〉
1. いそさふくヨーらしゃヨーハリー
なちとううり
ヨーへイヨージントヨー
2. ゆくぬふくヨーらしゃやヨーハリー
なまどうやゆる
ヘイヨーヤユルヨー

翌日（25日）は、午前中、神女たちを中心^トに12か所拝みをする。朝、公民館から、拝みに多くの方が参加するようにとの放送があった。浜の神女たちも比嘉に拝みに入る。

夜8時すぎ、東西の旗頭がそろってノロ殿内へ行く。庭でカチャーシの曲に合わせて旗頭をにぎやかに持ち上げた後、旧公民館へ向かう。旗頭のうしろにウスデークを踊る女たちが続いている。旧公民館で旗頭を所定の位置に結わえる。8時半ごろ大太鼓を打ち鳴らし、旧公民館で踊りがはじまる^トことをムラ人に知らせる。ムラ人が大勢

集まった。はじめに東のウスデークが踊られ、続いて西のウスデークが踊られた。東のウスデークは鼓打ち6人、踊り手23人（うち小中学生12人）で構成され、西は鼓打ち6人、踊り手26人（うち小中学生17人）で構成されていた。

ウスデークが終わって、舞台で踊りが演じられた。演目は、かぎやで風節、スリー東、ちんぬくじゅーし、ていんさぐぬ花、浜千鳥、民謡、加那ヨー、上り口説、あやかり節、前の浜などで、おしまいにカチャーシーを踊り、11時ごろ終わった。

[浜の豊年祭]

一方、浜でも綱引きと舞台芸能が、公民館前で行われた。浜の綱引きや芸能は実際にみることはできなかったが、芸能のプログラムを紹介しておきたい。会長あいさつ、かぎやで風節、豊年、区長あいさつ、くんぬはし節、海ぬちんぼーらー、前の浜、汀間当、繁唱節、上り口説、南洋浜千鳥、鳩間節、谷茶前、万歳、祝い節、揚作田節、まみどーま、安里屋、貫花、浜千鳥、四季口説、あやかり節、湊くり節、黒島口節、踊りくわーでいーさ。

(19) シヌグ

6月26日。この祭祀は現在は行われていない。かつては、浜に小屋を建てて、男たちが一晩籠もったり、朝早く、棒や竹を持つて各家で「シヌグエンチャー ウミニウイラレー」といいながら、家の壁をたたき、ネズミを追い祓うことも行っていたという。

(20) ムシボシ

7月15日。衣類を虫干しする。

(21) タナバタ

7月15日。墓の掃除をし、13日からお盆がはじまることを御先祖さまに報告する。

(22) 盆

7月13日から15日。13日はウンケー（お迎え）、14日は中日、15日はワークイ（お送り）。15日にはエイサーを演じる。

(23) ヨーカビー

8月8日から11日の間に行う。悪霊・災厄祓い。

(24) シバサシ

8月9日・10日。悪霊・災厄祓い。

(25) ウフアシビ

8月28日から30日。〈13年マール〉といって、浜では子（ネ）年、比嘉では丑（ウシ）年に、だいたい的にムラ踊りを行う。舞踊、棒踊、劇、組踊などが演じられる。

(26) チクザチ

9月9日。菊酒。家族の健康と繁栄を祈願する。

(27) ムーチー

12月1日。サンニン（月桃）の葉で包んだ餅をつくり、特に男の子の健康祈願をする。

(28) 御願解き

12月24日。火の神に1年間の感謝をする。

◆浜比嘉島での調査では、次の方がたにお世話になった。厚く感謝申しあげる

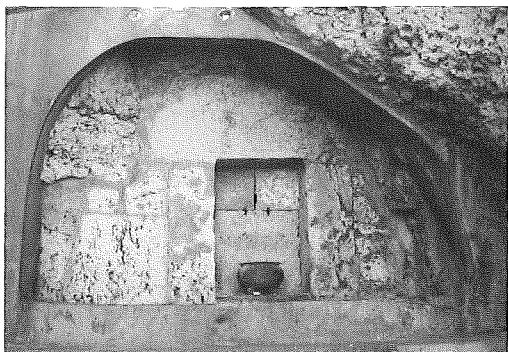
次第である。

金城善勇氏（浜 公民館長）

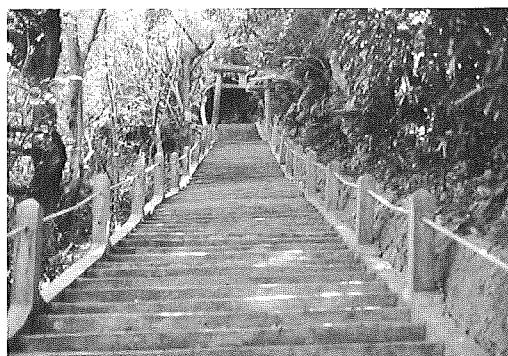
島田 明氏（比嘉公民館長）

吉本シゲ氏

吉本清宜氏



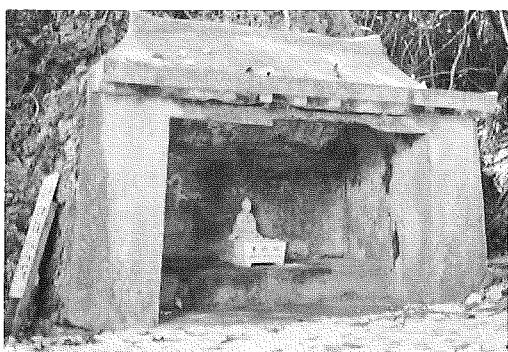
アマミキヨの拝所〈比嘉〉



シネリキヨの参道〈比嘉〉



地頭代火の神〈比嘉〉



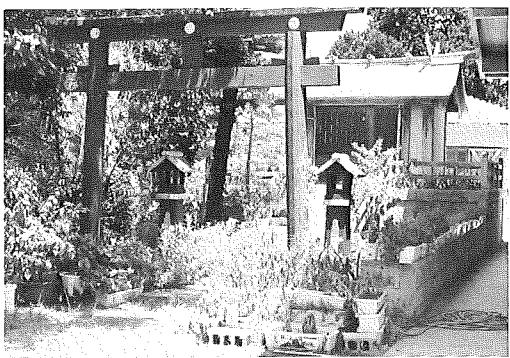
東の御嶽の祠〈浜〉



西の御嶽の祠〈浜〉



ビジュル神の祠〈浜〉



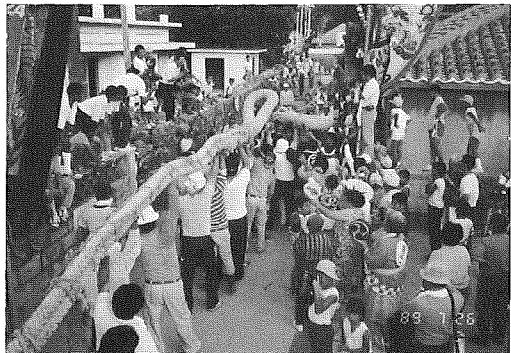
地頭代火の神 <浜>



サングワチャ一（龍宮神）<浜>

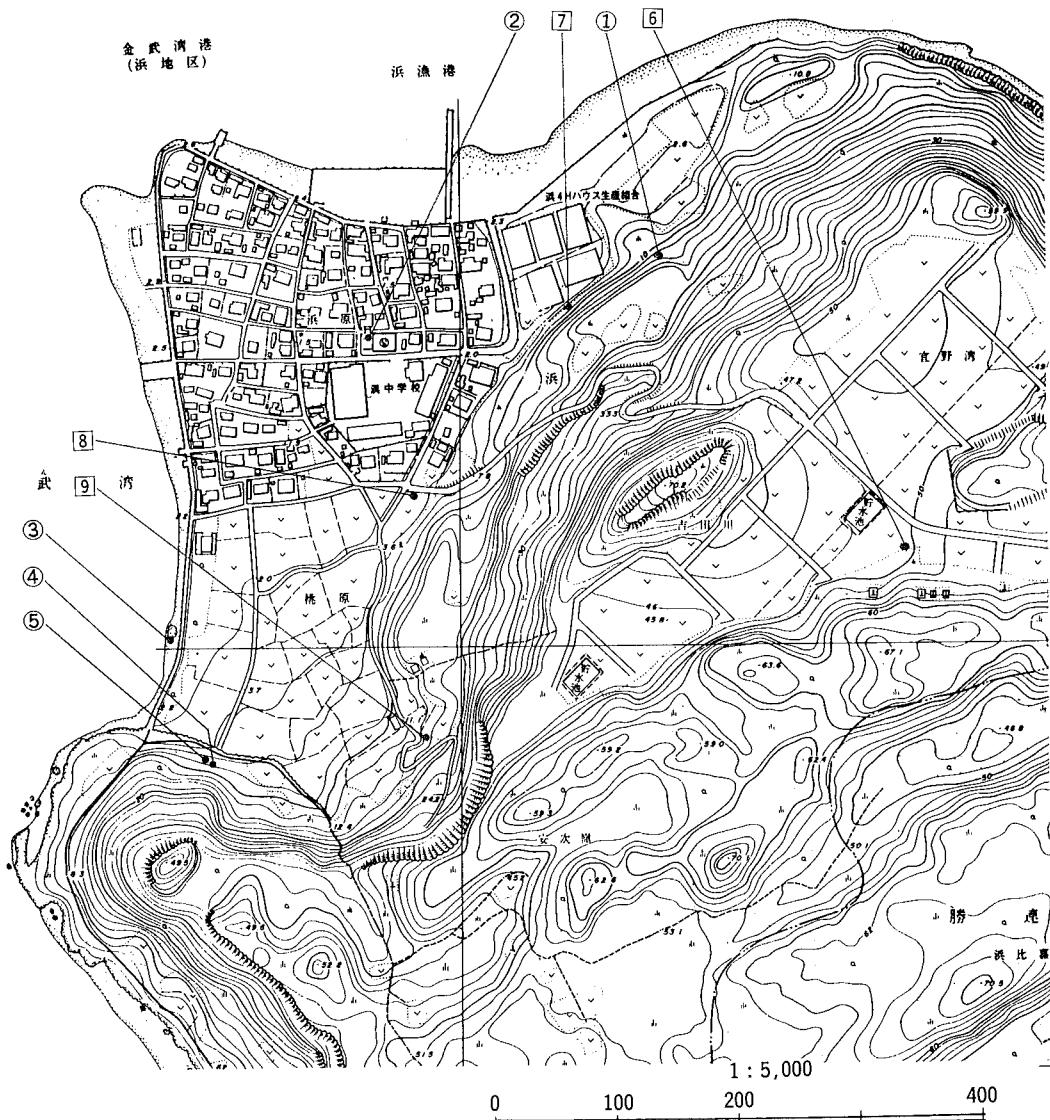


綱の道ジュネー（東ムラ）<比嘉>



ナカミチでの綱寄せ <比嘉>

祭場1 <浜>



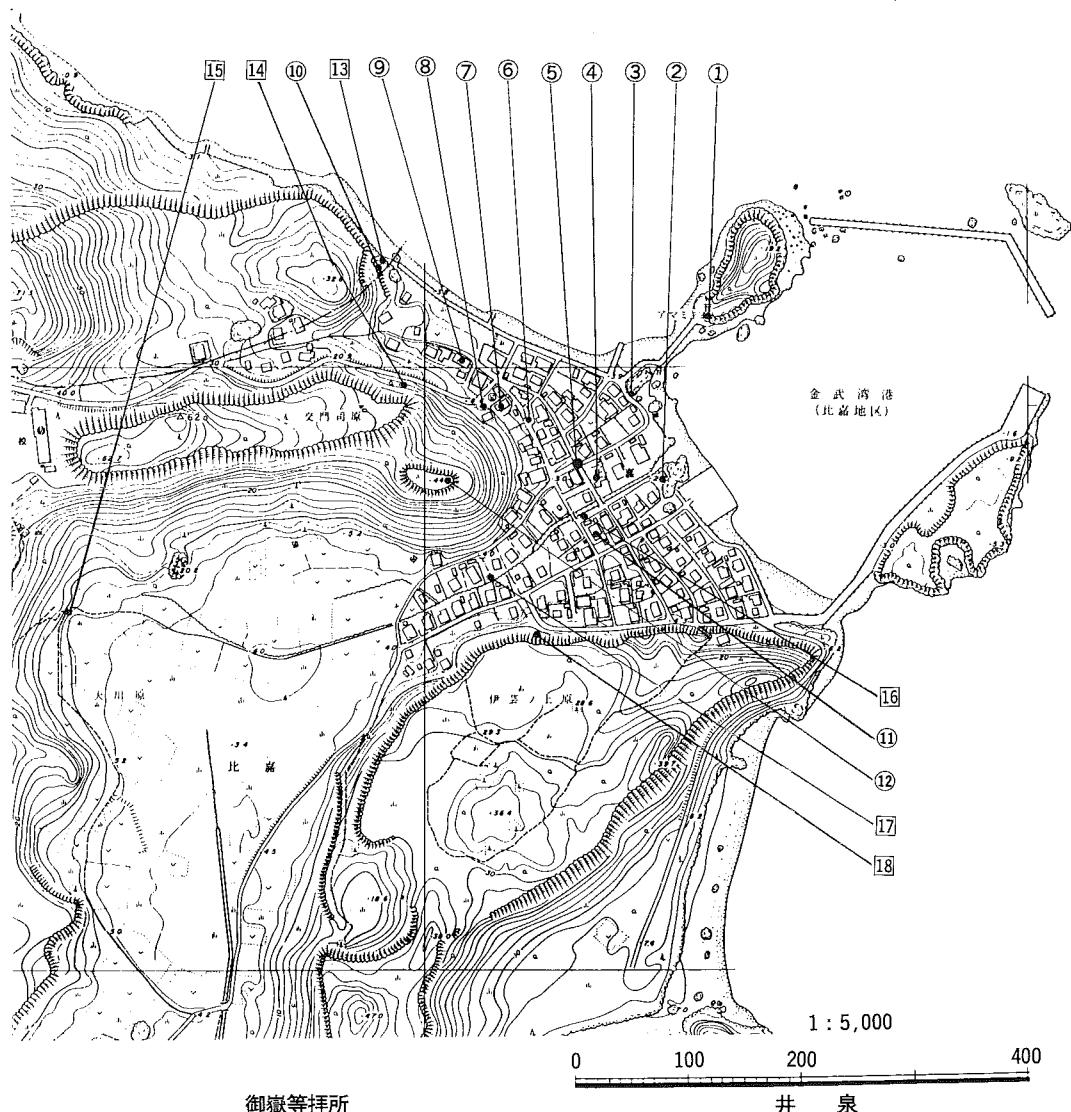
御嶽等拝所

- ①東の御嶽
- ②地頭代火の神
- ③サングワチャーチー石
- ④ビジュル神
- ⑤西の御嶽

井 泉

- ⑥ユチャガーチー
- ⑦アガリガーチー
- ⑧ウブガーチー
- ⑨シーローガーチー

祭場 2 <比嘉①>



①アマミキヨ

②カジマヤーグワー

③タチンニー

④タイラ神屋

⑤ナカミチ

⑥火の神

⑦バン殿内

⑧地頭代火の神

⑨ノロ殿内

⑩按司墓

⑪エーグチ神屋

⑫比嘉ダスク

⑬上ヌカー

⑭ハマガ-

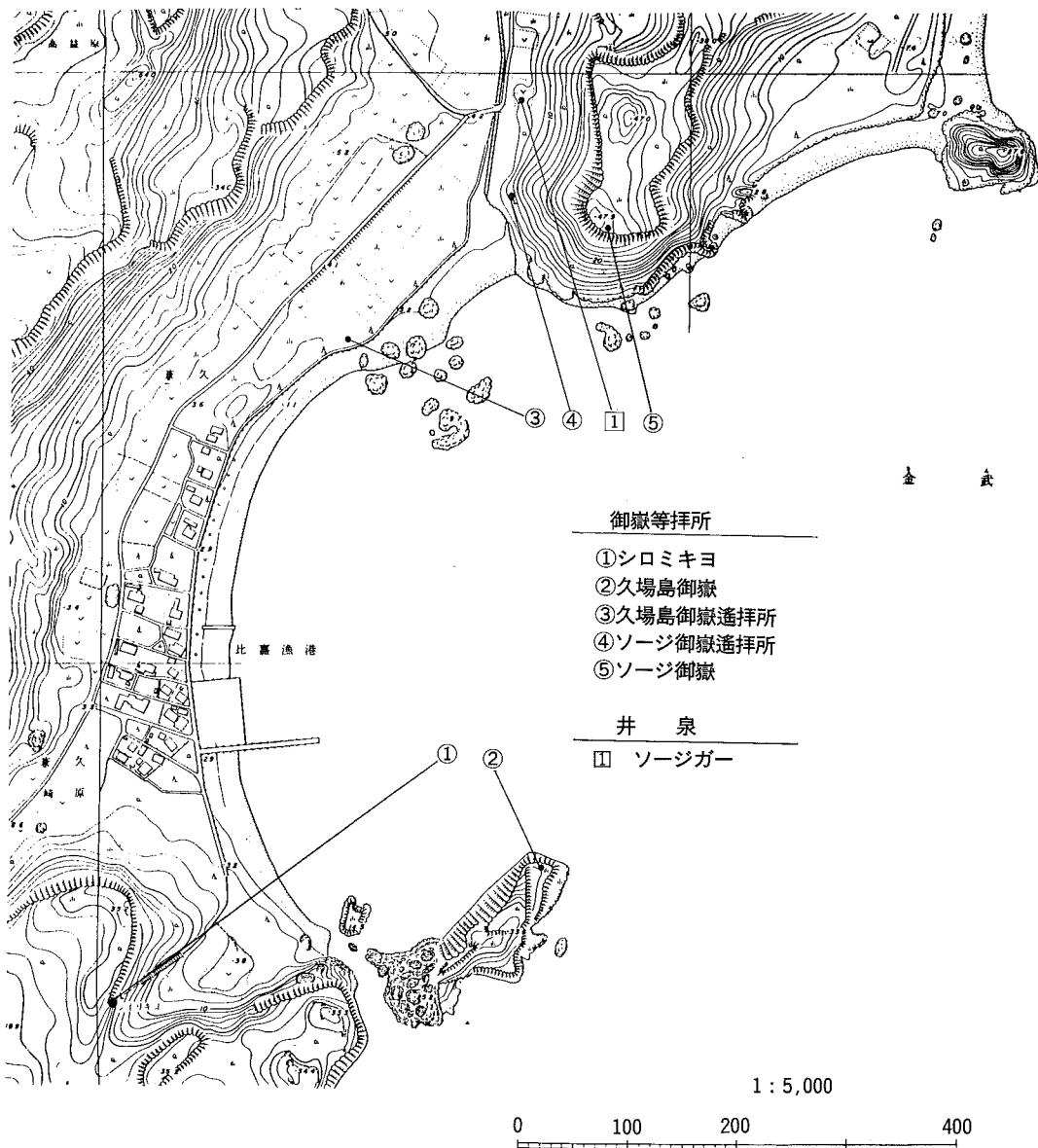
⑮ハルガ-

⑯ミーガ-

⑰チーガ-

⑲アガリガ-

祭場 3 <比嘉②>



県立博物館総合調査報告書Ⅶ
－浜比嘉島－

平成2年（1990）3月31日発行

発行 沖縄県立博物館

那覇市首里大中町1の1

TEL (0988) 84-2243

86-4353

印刷 わかば印刷社